奸悪な焔の舌に貪り嘗められる、黒い雨願を開いて、老ぼれた、目の見えない顔のやうに、私を睨め返した。そして焔の舌が丸太を燃やすにつれて、しい〳〵と音を立てたり、ぱち〳〵爆ける音をさせたりした。

私はその火の中にグリシヤの妹を見た。そして烈しい悲痛を以て考へた。

『どうして人間はこんなに互に迫害したりたゝき滅ぼしたりし合ふのだらう。』

グリシヤの言葉は、秋の枯れ萎れた木の葉のやうに、早くそして頻繁に彼の唇から落ちた。

『父は殆ど氣狂ひになつてしまつて、足を踏み鳴らして叫びました。

「あの子は自分の父親の顔に泥を塗つた。そして自分で自分の靈魂を亡ぼして了つた。」

父は葬式がすんだあとまで正氣に返らないまゝでゐました。葬式のときに、父は、カザランの町中の人がすつかり、哀れなエリザベズを墓まで送つて行つて、花束で以てその棺桶の息を窒いだのを見ました。

「みんながだれもかれもあの子の味方をするのを見ると、私はたしかにあの女を虐待したのだ。」

父はかう言ひました。』

グリシヤがこの陰鬱な話をしたときには、彼の目には涙が浮んだ。私は彼が目鏡を拭くのに手を振はせてゐたのをも認めた。

『私はこんな不幸が起らない前だつて、どこかの修道院へ這入りたかつたのでした。』

彼はつゞいて言つた。

『「行かして下さい。」かう言つて私は父に頼みました。父は私を罵つてぶち擲りました。けれども私の決心は少しも動かされませんでした。

「私は商ばい人になるのは厭だ。行かして下さい。」

私はかういひました。そのときには父のあの頑固な心も、リザの死のために感動してゐたときでしたから、父はたうとしまひに言ふとほりになりました。私はこゝに最早四年ゐます。こゝへ來る前に、ほかの修道院へ二ところも行つて見たんですが、どこへ行つて見てもみんな商ばいをやつてるところばかりで私の靈のための安息は見つかりません

でした。あいつらは地面や神の神聖な言葉や蜂蜜や、奇蹟やを商ひしてゐるんです。さういふのを見ると全く厭になつてしまひます。』

彼の話は深く私を動かした。私はそのときまでは自分に課せられてゐる重い課業のために疲れて了つて、殆ど物事を考へ入ることもしなかつた。けれども、言はゞ私の頭の中で眠つてゐた、例の制御に了へない考へがこのとき一瞬間に目を覺ました。

私はグリシヤに言つた。

『私たちの神はどこにゐるのだい？　この世では私たちはほんの移り氣と、理非の辨へもない、人間の愚鈍に取り卷かれてゐる。大きな不幸から出て來る、下らない詐欺の外には何にもない。どこに、あゝ、どこに神がゐるのだらう。』

かう言つてるところへミカが歸つて來た。そして私たち二人を引き分けた。

その日からグリシヤは屢〻私をたづねて來た。私は彼に自分の考へを打ち明けた。彼はそれを聞いて愕いて、謙讓を勸告した。

『それぢやどうして人間はそれだけの苦痛を受けなくちやならないのだらう。』

私はかう聞いた。

『罪があるからだよ。』

と彼は答へた。

彼の考へでは、すべてのことが皆な神から來るのであつた。饑渴も大火も變死も、荒廢させる大水も――全く萬事神意から出るのだといふのである。

『もしさうだとしたら、それでは神は地上に不幸の種をまき散らす種蒔手だ。』

私はかう言つた。

『ジョブのことを考へて御覽よ。――お前さんは言ひたい放題なことを言ふ人だ。』

彼は私の耳に呟いた。

『ジョブの例は何の證明にもなりやしない。私がもし彼の位置にゐたら私は神にかう言ふんだ。「わしたちをそんな恐怖で迫害しないで下さい。私をどこへ導いて行くんだか撲ちまけて言つて下さい。私はあなた自身の姿に型どつてあなたに造られた、あなたの力の子です。だから、あなたの子を排斥して、あなた自身を屈辱させるのはお止しなさ

い。」かう言ふんだ。』

私はさう答へた。

私の愚かな、神を瀆す言ひぐさが時々グリシャを泣かすことがあつた。

『よ、お前さん、――よ。』

彼は私に抱きついて呟いた。

『私はお前さんがそんなことをいふのが悲しい。悲しいばかりぢやない怖いよ。お前さんの言ふことやお前さんの考へは惡魔の仕わざだよ。』

『私は惡魔を信じやしない。もし神が全能だとしたら……』

私の言葉は尙より痛く彼を苦しめた。彼は純正な大人しい性格の男であつた。私はしみ〴〵彼を愛すやうになつた。

私は僧院長から課せられた懺悔の苦行をやつた。仕事がすむとすぐに敎會堂へ行つた。兄弟のニコデムスが戸を開けてくれて、私が這入るとあとを閉めた。貫木の音高い響きが沈默した會堂を通して反響した。

私は最後のかすかな反響が消えるまで戸口で待つた。それから磔刑の畫のところへ歩いて行つて、その前に膝をついて屈まつた。私は弱つてゐるので立つてることが出來なかつた。兩手兩足が勞働のために痛んだ。私は讃美歌を歌ふ氣にはなれなかつた。

私は兩手で膝を抱いて、そこに坐つたまゝ、眠い目をしてそこいらをじろ〴〵見廻した。そしてグリシャのことや自分自身のことを考へた。

それは眞夜中時であつた。暑くて息がつまるやうな晩であつた。けれども、會堂の半ば暗黑な中は冷んやりして心持がよかつた。そちこちにランプが聖像の前にゆら〴〵點つて、互に目ばたきをし合つてゐた。彼等の、裂けた舌のやうな小さな青ずんだ焰は、上に聳えてゐる圓屋根へ向けて飛んで行かうとしてゐでもするやうに思はれた。或はもつと高く、空へまでも、そしてその夏の夜の星へまでも飛ばうとしてゐるやうに見えた。

燈心がかすかにぱち〴〵云ふのが聞える。それがそれ〴〵自分に特有な音を立てるのであつた。うと〴〵と睡氣のさしてゐる私には、會堂は神秘な、目に見えない一つの生命に充ちてゐるやうな氣がした。その生命は、ランプが斷えずぼんやりと光つてゐる中

で、謂はゞ自己自身と話しをしてゐでもするやうに思はれた。暗い、心持のよい靜寂の中に、聖徒たちの顏は、恰もそれらの聖徒が何かまだ解けない謎を考へ込んでゐでもするやうに、默想に戰いてゐるやうに見えた。亡靈のやうないくつもの蔭が、私の顏の上を、そつとすべつて行くやうな氣がした。そして油やサイプレスの木材や香料の、纖美な物なつかしい匂ひが私を取り圍んだ。禮拜堂の扉の金や靑銅は、その光輝が落ついて和げられてゐるやうに思はれた。銀は溫かい親しさうな光りを見せた。その他あらゆるものが溶けくづれて、廣い流れになつて、大きな夢の畫の中へ流れ入つた。

會堂は濃い朧ろげな雲のやうに動き振へて、恰も、私にはその言つてる言葉の解らない、徐つと私語かれた祈禱を以て鼓動してゐでもするやうであつた。

私はいろんなものゝ影の舞踏に圍まれたまゝ拂ひのけられた。そして穩かな睡氣が地の領土の先きへふは〳〵と私を運んで行つた。

鐘が朝の禮拜を告げて響く前に、例の沈默な兄弟ニコデムスが來て、しづかに私の頭に觸つて、

『安らかに出てお行きよ。』

と言ひながら私を起した。

『許して下さい。私はまた眠つてゐました。』と私は言つた。

私は膝を起して、ニコデムスに支へられながら、よろめき〳〵會堂を出た。彼は殆んど聞き取れないほどの私語きで私に言つた。

『私の恩人よ。神はお前を許して下さるよ。』

ニコデムスは平凡な老人であつた。常にすべての人に顏を隱さうとしてゐた。彼はだれをでも自分の恩人と呼んだ。

或日私は彼に言つた。

『ね、あなたは永久に沈默するといふ誓ひを立てゝゐるのですか。』

『いゝや。たゞ、その：何か言ふことがあるなら言ふんだけども。』

彼はかう答へて、深い溜息をした。

『だけどもどういふわけで世間を捨てたんです？』

『私には私だけの理由があつたのだ。』

その上追求して聞いたところで彼は口を閉いでゐるか、それでなくばひどくもじ〳〵したやうに私を見て、かういふのである。

『恩人よ。　私は知りません。』

時には私はかう考へた。

『恐らくこの律僧もやつぱり一つの答へを求めてゐるのだらう。』

私はこの修道院を出たくてたまらなかつた。

さうしてゐる中にまた一人の人物が舞臺に現はれた。彼は道院の塀を越えて刎ね飛んだ球のやうに、不意に私の目の前に搖れ上つた。彼は小さな綺麗な、彈力的な男で圓い鼻のやうな目と、鍵鼻と、薄黄色い髪とを持つてゐた。そのいつも微笑してゐる口のほとりには綿毛のやうな口鬚が生えてゐた。口には齒が白く光つてゐた。

彼はいろんな滑稽を言つたり、女に關したいさな話をしたりして、集團のすべてのものを面白がらせた。そして自分でも夜になると道院へ女たちを引つぱり込んだり、欲しい

放題に杜松子酒を密輸入したりした。全く愕くばかり技倆のある男であつた。

私たち二人は屢出會つた。或時私は彼に言つた。

『ほんとにどういふ譯でお前さんはこの修道院へ這入つたんです？』

『私かい？　何、一杯のスープさ。』

『食はうといふには働かなけやならないぜ。』

『神はそんな規則はたゞ百姓たちのために宣告したんだよ。私は町の人間だ。おまけに二年間大藏省で暮してゐた。私は自分を一種の權威だと思つてもいゝだらうよ。……』

私は常にどういふ動機が人間を動かすのかといふ事を見つけようとする好奇心があつた。それがこの男に對してはことに鋭かつた。兄弟ミカは、私が充分仕事に馴れたのを見たので、近い頃は非常にづぼらになつた。彼はいつも、どこかこゝかへこそりと遁げて行つた。だから私はそれだけ餘分な仕事を背負はされた譯だけれど、併し一方では、彼がゐてくれないので助かつた。彼がゐなければ私は思ふまゝに同僚たちと喋り合ふ事が出來るからであつた。私たちは――グリシャと、例の陽氣なセラフィムと私とは――所つ

中三人で寄り集つた。

グリシヤはいつも、狂熱的に興奮して、私の言葉を兩手で防いだ。その間セラフィムは口笛を鳴らしたり笑つたりした。そして同時にその捲毛の頭を搖すぶつた。

或とき私はセラフィムに言つた。

『時にセラフィム、お前は本當に神を信じてゐるのかい。この惡もの。』

『そのことはいづれ後に三十年ほど經つたら話すよ。——私は多分六十になつたら、自分が無神論者か無神論者でないか解るだらうと思ふ。けども、現在この瞬間には私には何一つだつてきちんと別つてゐやしない。それに私はいゝ加減なことをいふのは厭だ。』

それから彼は二人に海の話をし出した。彼は美しい言葉で海のことを話した。恰も一つの大きな奇蹟を語るやうに、全きり聲を低くしたり、さうかと思ふと深い調子になつたりするけれど、いつも、空の星のやうに、歡びをもつてきらびやかに輝きながら、恐れと愛とを以て話すのであつた。

私たち二人は默つて彼に耳を傾けた。二人の心は、彼がこの威嚴深い生きた愛らしさ

について語るすべてを聞いて悲しかつた。

『海といふものは地から空の原野を、地球の上に綠門形にかゝつてゐる空間の國々を見つめてゐる、一つの青い目のやうなものだ。そして、微細に感じの尖つた人のやうに、いろんな星の行動や、彼等の神祕な運行を見拔き、その生きた不斷の流動の中へ映してゐる。——ぢいつと海の浪を見入つてゐると、空もやつぱり、遠い彼方の大洋のやうに思はれる。そして星がその大洋の中の黃金色の島のやうな氣がするよ。』

彼は感銘的な言ひ方でかう言つた。グリシヤは蒼ざめた頰をして耳を傾けた。そして平和な微笑みが、月光のやうに彼の顏を掠めて横ぎつた。

『が、かういふ不可思議と美しさとにかゝはらず、われ〳〵には商賣をやるよりましな事はない。實際それよりいゝ事はないよ。』と、彼は悲しさうに呟いた。

彼はその次には、コーカサス連山のことを話し出した。彼は物悲しい森嚴な國土を——天國と地獄とが出會つて、併もその雙方が等しく自分の尊威に誇り、調和と、兄弟のやうな愛の下に統治してゐる仙地を——語つた。

『コーカサス連山を見るといふことは、子供の心のやうなすが〳〵しさと純潔と、惡魔の智慧の傲慢な嘲笑とが、一つの微笑みの中に結合されてゐる、本當の地球の表面を見るといふことだ。』

彼は急に狂熱を帶びてかう叫んだ。

『コーカサスの連山は人間の力の試金石だ。あそこでは弱い心は陰鬱になつて地球の強い力の前に恐れを持つて振へるのだ。けれどもその代り強い人間は自分の力が殖えるやうな氣持がして、得意に愉快になる。その山が、聳え立つた頂きを、天の寂寥の眞ん中の電光のところまで高めてゐるのと同じやうに――得意に愉快になるんだ。』

グリシヤは溜息をして、ひつそりした調子で聞いた。

『だれが靈の行くべき路を指してくれるだらう？　靈は地の方に向くべきものかそれとも地から背き離れなければならないのだらうか。われ〳〵は何を受け取り、何を拒めばいゝのだらうね。』

セラフィムの顏は當惑した、併し暢氣な微笑みを帶びた。

『空を覗くのが愉快なら空を覗くさ。お前が覗いたつて空の輝きは增しもしなければ減りもしない。それだけは大丈夫安心していゝよ。』

私はセラフィムの言ふことが解つたやうで、同時に解らなかつた。

或時私はむか〳〵して彼に言つた。

『へえ、ぢや人間は？　人間についてはどういふ意見を持つてるんだい？』

彼は肩をすぼめた。そして笑つた。

『人間かい？　それはお前、人間といふものはみんなすつかり種類の異つた、いろ〳〵な草のやうなものだ。盲目には太陽だつて黑いや。自分と戰爭をしてるものは神とも敵同志になつてるんだ。それに人間はまだ非常に若い。大人扱ひをされるには若過ぎる。三つになる男の子をミスター何々つて言やあしないだらう？』

彼の唇はかう言つたやうな冗談に溢れた。丁度サベルコがさうだつたが、いろんな冗談が林檎の花のやうに彼の口から飛んだ。この男にどんな眞面目な質問を持ち出しても、彼はそれを洒落で以て追ひ拂つた。彼の手馴れたやり方が私をむか〳〵させた。私

は怒つた。すると彼はちきに笑つた。

時々私は怒つて彼に言つた。

『怠けもの奴。こゝでのらくらして肥つて行くんだから愕かあ。』

すると彼はかう言つた風な返答をするのであつた。

『われ〳〵で言へば自分の麵麭を食つてる奴が偈るるんだ。われ〳〵の百姓たちを見るがいゝ。あいつらは一生涯穀物の種を蒔いてゐる。そのくせ穀物を食ふことは許されないんだ。全く君の言ふのは本當だ。勞働は私の柄ぢやあない。勞働は人を疲らせ、弱らせるだけのもので、金持にしたりまる〳〵肥らせてくれやしない。寢床に永く臥てる奴が肥るんだ。』

私は彼と議論した。けれども二人の論爭が了るとつい笑はずにはゐられなかつた。彼は全く單純な正直な男であつた。その性質が私を彼に引き附けた。彼には何等の詐りもなかつた。たゞかう言つてゐるだけだからである。

『何のことはない、私は小つぽけな蟲だ。だから私には大した害毒はないよ。』

彼の性格は餘程サベルコの性格に似てゐた。人生の騷ぎの中にゐながら、常に清澄な心を持續し、快活な氣分を保つてゐられる人間が居るといふことが全く私には愕かれた。

グリシヤと比べると、セラフィムは、晴れた春の日と秋の夕方とぐらゐ違つてゐたけれども、さういふ二人は互に、二人のどちらと私とより以上に仲よく暮してゐた。これは私を聊か苦しめた。

二人はどちらも間もなく出て了つた。グリシヤはオロネツへ行くつもりで出た。セラフィムは私に言つた。

『私はオロネツまで一緒に行つて一週間程休んだらコーカサスの方へまた行くんだ。お前も私たちと一處に來なけれや嘘だ。旅行をすればお前の求めてゐるものがそれだけ早く見附かるんだ。それでないにしてもお前の餘計なところが失くなるよ。それだつて幸だらうぢやないか。』

私はそのときには二人について行くことが出來なかつた。私は兄弟マーダリアスの宗教上の教戒を聽きに行つてゐたからであつた。マーダリアスは非常に私の興味を引いた

人であつた。

私は二人に別れの挨拶をした瞬間には悲しかつた。

十一

隱者マーダリアスは、禮拜堂の後の――寺院の塀の側に掘つた穴の中に暮してゐた。

昔は、この地下窟は寺院の財寶を賊徒の侵略から保全するための隱し場に使はれてゐたのであつた。一筋の地下通路が、禮拜堂からこの秘密の室に通じてゐた。後になつてその穴の上の圓天井が毀されて、部厚な板で造つた穴倉のやうなものがその上に建てられ、小さい窓が嵌められた。窓のぐるりには格子が組み立てられた。巡禮者たちはこの格子から、隱者を覗き込むことが出來た。引き窓が片隅にあつて、そこから螺旋形の梯子を下りてマーダリアスのところへ行けるやうに出來てゐた。

穴は深かつた。段々がすつかりで十二段あつた。そしてたゞ一筋の薄い光線がさしてゐるのみであつた。その光線は下の底まで屆かないうちに、地下の住居の濕りつぽい薄暗がりの中に消え果てゝしまつた。だからそこの梯段を下りて行くと全く目がぐら〳〵した。

その蔭ばんだ場所に、大きな石か、土の塚かなぞのやうな、或黑いものを見分けるまでには、格子から、長い間ぢつと見詰めてゐなければならなかつた。その黑いものといふのは、實は片隅に坐つたきり動かないでゐる隱者である。

私は彼のところへ下りて行くと、一種生溫い黴臭い濕氣でじど〳〵になつた。そしてはじめは何ものをも見分けることが出來なかつた。しばらくたつてから讀經臺と、その次に黑い棺が一つ、その闇の中から現はれた。その棺の中には、いくつもの十字架や、頭蓋骨や、そのほか色んな宗教上の記號で飾られた、黑い死體包みの布を着た、小さな、灰色の髮をした律僧が坐つてゐた。

片方の隅には丸い鐵の煖爐が置かれてゐた。その導管がぶく〳〵した蟲のやうに屋根まで這ひ上つてゐた。穴の煉瓦壁には綠色の黴が一面に生えてゐた。

信仰深い隱者は、兩手で念珠を握り、兩膝を抱へて、鉋屑を盛り上げた上へ、幽靈のやうに、徐つとして坐つてゐた。彼は頭を胸の上に深くこゞめてゐた。そのために、彼の俯つぶした背中は喞筒の柄のやうに曲つてゐた。

私はこの隱室へ下りるや否や、何んにも言はないで膝まづいて、隱者が言葉をかけてくれるのを待つた。けれども彼は長い間默つてゐた。そしてぐるり中が死のやうな靜寂に充たされてゐるやうな氣がした。私には、彼の萎びた鼻の先きより外には、彼の顏がさつぱり見えなかつた。

『どうしたといふのかい？……』と彼は殆ど聞き取れないくらゐに呟いた。

私はこの生きた死骸に對する憫れみに重壓されて一言も口が聞けなかつた。

彼は一寸の間待つて、彼の問ひを繰り返した。

『どうしたのかい？　お言ひよ。』

彼は同時に顏を私の方へ向けた。

あたりは非常に暗かつた。私には彼の目が見えなかつた。たゞ白い眉毛と、顎の上の總毛と、口鬚とが見分けられたのみであつた。彼の口鬚は、薄暗がりの中で形がないやうに見えてゐる、悲痛を帶びた動かない顏の上に、黴びた發生物のやうに見えた。私は彼の聲の、穩やかな呟きを聞いた。

『お前さんは議論好きだといふことだが、どうしてさうなのかい？　われ〳〵は謙讓に神に仕へなければならない。神と爭つて何の役に立つかい？　すつかり純朴になつて神を愛するのがわれ〳〵の義務だよ。』

『私は神を愛してゐます。』

私はかう答へた。

『よろしい、〳〵。神さまはお前さんを罰しなさるよ。けども、お前さんは何事も目に見ないものゝやうにしてやつておいでよ。そしていつも、「おゝ神よ、あなたに光榮あれ。あなたに光榮あれ。」とそれを言ひつゞけてゐるがいゝ。一念にそれを唱へて、ほかのことは何も言はないことですぞ。』

彼には明かに口を聞くのが困難であつた。それは多分體が弱つてゐるせゐであらう。それとも、口を聞くことに不馴れになつてゐるのかも知れなかつた。彼の言葉は生命のない響きを傳へた。そして彼の聲は死にかけた鳥の羽根のかすれ音に似てゐた。

私は私の疑惑を語つてこの老人を悲しませたり、彼が平靜に死を待つてゐる狀態をかき

亂したりするのが厭だつたので、彼に質問をする氣になれなかつた。私は身動きもしないでそこにさうしてゐた。上の方で音を包んだやうな鐘の音がするのが聞き取れた。私は空を見上げたかつた。けれども暗がりが私を壓へつけた。それで私は動かないまゝでゐた。

『絶えず祈りをおしよ。私もお前さんのために祈つて上げる。』

彼はかう言つて、再び沈默に返つた。彼は身じろきもしずにそこに坐つてゐた。私は全き悲しみの戰きが體中を走せ通した。私は身ぶるひをした。

しばらくして彼は呟いた。

『お前さんはまだそこにゐるのかい。』

『えゝ。』

『私には何にも見えない。ぢや、お前に神の御加護あることを祈る。もうお去でよ。そして議論をするのはお止めよ。』

私は徐つと盜むやうに出て行つた。上の地面へ出て、再び天の純淸な空氣を吸ひ入れ

たときには、私はその墓の中から遁れ出た喜びに醉つた。マーダリアスは、最早三年以上もその墓の中に生きてゐるのであつた。

私は僧院長の命令で、敎戒を受けるためにこの隱者を五度訪問することになつてゐた。けれども、いつ行つても私はたゞ默つてばかりゐた。私は口を聞かうにも聞けなかつた。隱者は私の聲を求めて耳を傾けた。さうしてそのあとで、奇態な、この世の聲とも思へないやうな調子で言つた。

『昨日來たのはお前さんかい？』

『えゝ。』

すると彼は再び途切れ〳〵に呟きはじめた。

『神さまに逆つてはいけない。お前さんには何が要るぞい？　何んにも要りはしない。高が麵麭の一片だ。神に逆らふのは罪惡だ。それは惡魔のさせる業だ。惡魔どもは、機さへあれば人間の揚足を取るものだ。私は彼等を知つてゐる。惡魔は怒つてゐる。彼等は惡意を持つてゐる。彼等は怒つてゐるから惡意を持つてゐるのだ。

お前は怒つてはいけないよ。怒れば惡魔と同じやうになる。人がお前さんを怒らせても、「基督があなたを救ふことを祈る。」と、かうその人に言はなければいけない。さうしといてお前さんはお前さんの行くべき道を行き、その人にはその人の道を行かせておやりよ。すべてこの地上のものはみんな滅びてしまふべきものだ。お前の靈のことを考へなさい。それが一番主なことだ。靈をだれにも奪はせてはいけない。だれも得う奪つて行けないやうに隱してお置きよ。』

彼は彼の言葉をばら撒いた。そしてそれが遠くの火事から飛んで來る灰のやうに私の上に落ちた。私の心はそのために何の感動も受けなかつた。彼の言ふことは、私が必要を感じてゐる言葉ではなかつたからである。私は、黑い、混亂した、倦き〳〵する、苦しい夢の中にゐるやうな氣がした。

彼は恰も考へ込んでゐるやうにかう言つた。

『お前さんは默つてゐる。それはよい。他のものには勝手な眞似をさせて置くがいゝ。けれども私はお前さんには沈默を勸めるのだ。私のところへやつて來る他のものは、い

ろんな事を喋つて喋つて喋り抜くのが常だ。私にはその人たちが何のことを言つてるのか解らない。彼等は女どもの話をする。それが私に何の關係があらう。彼等はあらゆる問題について喋る。私が何を知つてゐよう。譯の解らないはごとだ。けれどもお前さんは感心に默つてゐる。私は自分では何にも言はないでゐたいのだ。けれども僧院長どのが、「彼を慰めてやつてくれ。彼は慰めを欲しがつてゐる。」と言はれた。よろしい、結構だ。けども私はどちらかといへばてんで口を聞きたくない。神よお前さんを護れ。……お前さんたち皆を。——私からはすべてのものが奪はれて了つた。たゞ祈りが遺つてゐるばかりだ。人がお前さんを苦しめても打つちやつておき給へ。惡魔どもは人間を苦しめるのが好きだ。彼等は私をも苦しめた。……私の兄弟ですらいつも私を撲ぐつたものだ。……それから私の女房は……私の女房は砒素を飲ませて私を毒殺しようとした。あの女は私を鼠か二十日鼠のやうに思つてゐたやうだ。あいつらは私のものを一々奪ひ取つた。さうした揚句には、私が村へ附け火をしたと言つて訴へた。あいつらは私を火の中へ投げ込まうとした。……私は監禁の苦しみを受けた。……あらゆる目に會つた。——

私は裁判官の前に引き出された。そしてまた牢屋に撲ち込まれた。神よ彼等に仕かへしをして下さい。併し私は彼等を許してやつた。私は自分のために彼等を許してやつたのだ。本當に山ほどのさま〴〵の不幸が私を壓へつけた。私は呼吸が出來なかつた。けれども一たび彼等を許してやつてからは、私はすつかり仕合になつた。不幸の山も去つてしまつた。惡魔も侮辱を感じて逃げ出して了つた。お前さんも、すべての人を許してやらなければいけない。私は何にも要しいものはない。お前さんもやつぱりそんなになるよ。』

私が四度目に行つたときには彼はかう言つた。——

『私に麵麭をほんの一寸持つて來ておくれよ。私は一切れしやぶりたい。こんなに弱つて氣分が惡い。どうか基督のために私を許しておくれよ。』

私は悲痛に沈んだこの可哀想な老人に深い哀れを感じた。

私は彼が口の中でぶつ〳〵呟くのを聞いたときかう思つた。

『おゝ神よ、これは何といふことなのです？　どうしてこんなことにならなくちやならな

いのでせう?!』

彼は再び干からびた舌をして呟いだ。

『私は骨々が痛い。 それが晝も夜も私を苦しめる。 麵麭の皮を一きれしやぶつたら少しは氣分がよくなるかも知れない。 あんまり骨々が痛んで苦しいので祈りも出來ない。 だれでも所つ中祈つてゐなけりやいけない。 あらゆる瞬間に祈つてゐなければならない。眠つてゐる間でもだ。 さうしないと惡魔が直きにやつて來る。 彼はお前さんの名を呼んで、そしてお前さんが住んでゐたところやなぞ、一々のことを思ひ出させる。 彼はあそこの煖爐の上に坐つてゐる。 よく煖爐が熱く、赤燒けになることがあつても平氣でゐる。そんなことには馴れてゐるのだ。 彼は私と向き合つて坐つてゐる。 彼は白髮になつてゐるけれど、それでもあそこに坐つてゐる。 私は十字の印を切る。 そして最早彼には目をくれない。 私は彼には飽きてゐる。 あちらへ行つて了へと私は言ふ。 すると彼は蜘蛛のやうに壁に沿うて這つて行く。 彼は汚い襤褸切れのやうに空中にばた〳〵してることがたび〳〵ある。 私につき切りの惡魔はいろんな形になつて現はれる。 私のやうな老人

と一緒にゐるのにはうんざりしてるのだが、だつて他に何うしようもない。 彼は私のところへ派遣されたのだ。 そして私を待ち伏せするのが彼の義務だ。 彼に取つては私のやうなこんなぢいさんのところで暮すのは面白くないことだ。 私はもう彼に對しては何の厭さも感じない。 彼はたゞ指圖を受けて動いてゐるだけだ。 私は彼には馴れて了つた。

「おい〳〵、私はもうお前には飽き〳〵したよ。」私はとき〳〵かういふのだ。 そして彼には見向きもしない。 彼は厚かましくない奴だから、さういふときには默つてゐる。たゞ彼はいつも私の名前を思ひ出させる。』

老人は頭を上げて、かなり高い聲で言つた。

『私はミカイロ・ペトロヴ・ヴィアキレヴといふものだ。』

かう言つて彼は再び棺の中へ沈んで後によりかゝつた。 そしてつぶやいた。

『彼は再び私を襲つて來た。 おゝ惡魔奴。――マトヴよ、お前さんそこにゐるのかい?

お行きよ。 神さまがお前さんを祝福して下さるのを祈る。』

私はその日こそは激憤の餘りに泣き出したかつた。 このぢいさんが何になる。 あんな

懺悔の苦行に美しいとか氣高いとかいふ點がどこにあらう。私には全でそれが解らなかつた。私はその日も、その後長い間も、彼のことを考へないでは得ゐられなかつた。私には何んかかんかの惡魔が、私をも嘲笑し、私の耳を撲ちなぐつてゐるかのやうに思へた。

一番しまひに訪問したときには、私は出來たての麵麭をポケットへ詰めて行つた。私は人間といふものに對して怒り狂つた。彼は私が麵麭をくれると呟いた。

『これは〳〵。まだ温かだ。ほうら。』

彼は棺の中で搖り動いた。彼が麵麭を隱さうとしたときに、鉋屑が彼の下にかさ〳〵言つた。

『おゝ、〳〵。おゝ。』

と彼は呟きつゞけた。さうして、暗がりや、壁の黴や——つまり穴のぐるりにある一一のものがみんな搖れて、その隱者のかすれ〳〵な呻きを繰り返した。

『おゝ、おゝ——おゝ。』

彼は一週間に四度しか物を食はないのだから、餓ゑてゐるのも當り前であつた。

この、私の最後の訪問のときには、彼は口を利かないで、たゞ唇をぴちや〳〵言はせて麵麭をしやぶつた。彼にはたしかに齒が一本もないらしかつた。

私はしばらくぢつとしてゐた。それから言つた。

『マアダリアス敎父よ。どうか基督のために私を許して下さい。私はもう行きます。そしてこれきりで來ません。私はあなたがいろ〳〵私のために盡くして下さつたのをお禮申します。』

彼は急いで答へた。

『あゝ、さうかい。——私もお前さんに禮を言ふよ。麵麭のことは律僧たちには一言も言はないでおくれよ。さうしないと、彼等は麵麭を奪ひ取つて了ふから。あの律僧たちは實に嫉み深い。彼等も矢つ張り惡魔を割りあてられてゐるのだ。おゝあの惡魔どもよ。彼等惡魔は何のことだつて一々知り盡してゐる。いゝかい、何にも言はないやうにしておくれよ。』

彼はその後間もなく病みついて死んで了つた。彼はすばらしい葬式をして貰つた。大

僧正がすつかりの僧侶を引きつれて町からやつて來た。そして鎭魂歌を歌つた。

後になつて私は、その老人の墓の上に、いつも小さい青い焰が夜つぴて見えるといふ話を聞いた。

何といふ可哀想な話であらう。同時にいかにも唾でも吐きかけたいではないか。

十二

それから間もなく私の生活は急に換つて來た。

ミカが病氣になつて病院に送られた。私は彼の仕事を引き受けた。そして二人の手傳ひ手が私にあてがはれた。

三週間たつてから、食料番が私を呼びによこして、ミカは直つたけれども、私が頑固な氣質だから、私と一緒に働くことを拒んでゐると言つた。お前はこれからは、森へ行つて木の切株を掘り上げるのだと說明した。それは一種の刑罰と見做されてゐる仕事であつた。

『私が何をしたでせう。』

私はかう言つた。

その瞬間に、敎父アントニアス——例のきれいな律僧——が事務所へ這入つて來て、控へ目に片隅に腰をかけてぢつと聞いてゐた。

食料庫係はかう説明した。

『お前はこの務めがお前に振り當てられた理由を聞くのかい。それはお前が、お前の年齡や身分に不相應に性質が頑固で、そして傲慢に、仲間中のことを非難するからだ。そんなことをやれば相當の刑罰を受けるのが當りまへだ。院長さまはお情ぶかいお心から、お前にもつと樂な仕事を——この事務所の或仕事をお言ひつけになるお考へだつたのだが、お前のやり口で見るとお前はそんなことには向かない。』

彼は持前の鼻聲の、冷淡な調子で長い間喋つた。私には、それが彼には自身の本心から言つてることではなくて、たゞ職務上仕方なく、べちや〳〵と長たらしく喋つてゐるのだといふ事が目に見えた。その間敎父アントニアスは、煖爐にもたれて坐つて、口鬚を撫でながらぢつと私を見守つてゐた。そして、何かかんか言ふやうに私を激ましたがつてゐでもする容子で、その美しい目で私に微笑みかけてゐた。私は自分には人格があるといふことがこの人に見せたかつたので、食料庫係にかう言つた。

『私は昇進は求めませんけれども、そんな屈辱には不服です。あなたもご存じのやうに、

私はそんな目を見せられるわけがないんです。私の欲しいものはたゞ正義ばかりです。』

食料庫係は赤くなつて、杖で床板を叩き鳴らした。

『この無禮者。』と彼は叫んだ。

敎父アントニアスは彼の方へ體をよせかけて、何事をか呟いた。

『そんなことは問題にならない。彼はぶつ〳〵言はずに自身の刑罰を受けなければいけない。』

敎父アントニアスは肩を搖すつた。そして私の方へ向いて、溫かい、音樂的な、沈んだ聲で言つた。

『マトヴェよ、規律に服從おしよ。』

彼はこれだけの口數と、それに伴つた親切な一目で以て私を征服した。私は食料庫係に頭を下げた。そしてアントニアスに丁寧に挨拶をした。それから、私は、森の方の仕事はいつからやるのかと食料庫係に聞いた。

『三日經つてから。——それまでは牢に入れとくのだ。』

アントニアスがそこにゐなかつたら、私はたしかにこいつの體中のありつたけの骨々を撲ち碎いてやるのだつたけれど、私はアントニアスが言つた言葉を、彼にもつと接近せよといふ暗示のやうに解釋した。それだから、どんなことでも彼のためにはぶつ〳〵言はずに我慢する氣でゐた。

私は牢へ引き立てられた。それは事務所の下にある狹い室であつた。たゞ坐るだけの空間しかないので、中で立つことも横になることも出來なかつた。床には濕つた腐つた藁が撒きちらしてあつた。そのじめ〳〵した穴の中には墓のやうな沈默が漲つてゐた。二十日鼠一匹さへゐなかつた。そこは眞っ暗で、その中では、自分で自分の手が見えないくらゐであつた。顏のところまで持つて來ても殆ど見えなかつた。

私は一言も口を聞かずに、そこに坐つてゐた。私は石のやうに重たく、そして氷のやうに冷たい心持がした。私は自分のいろんな考へを防ぎ止める事に熱心してゐでもするやうに、齒ぎしりをした。それらのさま〴〵の考へは、火熱した石炭のやうに赤燒けになつて私を燒焦した。私はそこに誰か嚙みついでやるものがゐでもしやうものなら、喜

んで嚙み附くところであつた。私は自分の髮を引つ掴んで、體を左右に搖ぶりながら、精神の奧底で怒り狂ひ、叫び立てた。

『おゝ主よ。あなたの公明はどこにあるのです。それは、あなたの掟を瀆してゐるものたちに自由にされてゐる玩具ではありませんか。地上の力あるものたちは、彼等の力に醉ひ狂つて、あなたの掟を足の下に踏みつけてゐるではありませんか。あなたのお目には私は何ものですか。私は放埒な氣まぐれの犧牲ですか。それともあなたの美と正義との保護者ですか。』

私は修道院の生活を引つくるめて考へた。そしてそれがこの上もなく僞善的な嘲笑なものであることを見出した。

どうしてこれらの律僧たちを『神の下僕』と呼ぶのだらう。彼等はいかなる點に俗人より神聖だらう？　私は村の農民たちがすべての困苦と不幸との中に暮してゐる生活を知つてゐる。彼等は神から遠ざけられてゐる。彼等は酒も飲む、仲間の間で喧嘩もする。泥棒もすればあらゆる種類の罪も犯してゐる。けれども一方からいへば彼等は全で神の

掟を知らないのである。德を備へようと力める時間も精力も持たないのだ。彼等は饑渴の恐怖といふ一つの強い鎖で以て、いづれも自分々々の小さい地面に括りつけられてゐる。めい〳〵の小屋の四つの壁に縛りつけられてゐる。かうした哀れな難澁者に何が期待し得られやう。

けれども、この修道院では人々は安樂に富裕に暮してゐる。いろんな智識の本は、ちやんと彼等の手の届くところに横たはつてゐる。併も彼等の中で誰が眞實に神に仕へてゐるだらう。たゞ兄弟グリシヤのやうなあんな貧血性な弱い人間だけだ。その他の奴等と來ては、神はたゞ彼等の不正の口實、虛僞の泉として役だつてゐるだけである。

私は律僧たちが女をじろ〳〵見るときの汚れた淫亂や、すべての彼等の肉慾、怠惰、泥醉、彼等が施物箱の中のものを分けるときの喧嘩、それから彼等が、仲間の間で、丁度墓場の烏のやうに激しくがあ〳〵怒鳴るさまを考へた。それからグリシヤが、この修道院についてゐる農民たちは、一生懸命に働けば働くほど、ますます〳〵重く借金に累はされると言つたことをも思ひ出した。

その次に私の考へは自身の上に走せた。

『私はもうかなり長い間こゝにゐた。そしてそれが私の靈にどういふ利益を與へたらう。たゞ傷と膿胞との外には何にも得るところはなかつた。私はどういふ點で自分の心を富ましたらう。そして知る價のある何を習つたらう。單に惡德と憎むべき事實との外には何にも教へられはしなかつた。それらのものは、人間に對する厭惡を私に一ぱい詰めこんだ。』

牢舍は墓のやうに沈默してゐた。鐘の音さへも私の耳には達しなかつた。私は更に時間を計る手だてがなかつた。牢の壁の外は晝か夜かそれも少しも解らない。お互人間から日光を奪ひ取るやうな亂暴なことをするものがゐるだらうか。

その濕つた黴ついた暗黑は私を沈鬱にしてしまつた。私の靈は、恰も、私の生涯の行路に何の光りをも發しないまゝで燃え果てた。私が神の智慮と公明とを信じてゐたのも——私の心に取つて非常に大事な信仰——も、溶け去り消え失せた。

併し教父アントニアスの顏は、輝ける星のやうに私の前に光つた。そして私のすべて

の思想と感情とは、焰をめぐる蛾のやうに、彼のまはりを跳廻つた。私は空想の上で彼と話したり、私のすべての困苦を打ち明けて彼の助言を請うたりした。そして彼の情深い目が暗がりの中に輝いてゐるのを見た。

この人のために、この三日間の監禁は、私には貴かつた。しまひに牢舎を出たときには、盲目のやうであつた。足がひよろ〳〵した。そして自分自身の頭がまるで誰か他の人のものでゞもあるやうに變な感じがした。

仲間の律僧たちはこんなことを言つて私を嘲笑した。

『どうだ、精神にしつかり湯浴みをさして來たかい。』

夕方に道院長は私を呼びによこして、彼の前に膝をつかせた。そしてそれから長い説教をした。

『「われは罪人の齒を碎き、その頸を押へて軛に附けん。」――かう書いてある……。』

私は一言も言はずに、強い自制を保つてゐた。教父アントニアスが私の引受人として私の前に立つた。彼の情深い目もとは私の怒つた唇に封印をした。

すると道院長は急に、彼の性格の、より穏かな方面を示した。

『馬鹿もの。』

彼はかう言つた。

『お前には、私たちがちやんとお前の値打を見分けてゐてやり、お前のためを思つてゐてやるのが解らないか。お前の熱心と勤勉とは、認められないまゝに了りはしなかつた。且つお前の力量もそれ相當に認められかけてゐる。それで私はお前に二つの仕事のどちらかを選ばせてやる。お前はこの事務所で働きたいか、それとも教父アントニアス附きの平人修道者を勤める方がいゝか。』

私は温い湯の噴出を浴びせられでもしたやうな氣がした。私は喜びに窒息させられて、殆ど急には息が吐けなかつた。

『お願ひでございますが、お慈悲を持ちまして……私は平人修道者になる方が　　餘程ようございます……』

彼は眉を蹙めて、一瞬間考へ込んだ。そしていかにも鋭く私を見つめた。

『事務所へ這入れば森で働くのは許してやる。けれどもその反對に、教父アントニアスの平人修道者になるなら、森の仕事をもつと殖すぞ。』

『どうか……修道者にして下さいまし。』

『なぜだい、馬鹿だね。事務所の仕事は、そつちよりか樂でそしてもつと名譽なんだよ。』

けれども私の決心は動かされやうもなかつた。

すると道院長は頭を垂れて考へ込んだ。

『ぢやよろしい。私はお前を祝福してやる。お前は變つた男だ。私たちはお前を看守しなければならない。お前はどういふ出來心に捉はれてゐるのだらう。全でえたいが解らない。では安心して行け。』

私は森へ行つた。それは寒い四月でそこへ仕事は困難であつた。古い木株は土の中に深く植はつてゐた。直根は眞直に土の奥底まで割り込んでゐた。そして、より小さい根は茂つて固く土に喰ひついてゐた。そいつをどこまでも掘つめて、やたらに切りまくつて、次にそれへ馬を括りつけて引かせるまではいゝが、さて馬が力一ぱいに力んでも、動

くのはたゞ馬具ばかりであつた。

正午までには私は全く疲れ切つてしまつた。馬は泡だらけになつてぶる〳〵振へながら、

『私にはもうやれない。私にはとても叶はない。』

かう言ひたいやうに、目を聞くして私を見つめてゐた。

私は彼を劬はつて、やさしく頸を叩いてやつた。

『よろしい〳〵。解つたよ。』

私はかう言つた。そして再び掘り上げにかゝつた。私の小さい馬は、身ぶるひしながら、ぢつと私を見つめて首を搖すぶつてゐた。馬といふものは聰い動物である。私はたしかに、彼等には人間が自分で自分を馬鹿にするとそれがちやんと解るものだと思ふ。

その頃私は兄弟ミカと喧嘩をやつた。それが殆ど重大な結果を來たしかけた。私は午飯をすましてから仕事に出かけて行つた。そして已に森へ行きつくと、そこへミカが、棍棒を持つて不意に後から走つて追ひ附いた。彼の顏は怒り狂つて引んまがつてゐた。

彼は齒を剝き出して熊のやうに唸り立てゝゐた。

彼は立ち止まつた。私は待ちかまへてゐた。彼は一言も言はないなりに私を目がけて棍棒を撲ち下ろした。私は瞬間にひらりと避けて、彼の胃のところを撲りつけ、體中を蹴りまくつた。そして彼の胸の上に膝をついて棍棒を引つたくつた後に、かう言つた。

『一たいどうしたんだ。なんで私に撲つてかゝつたんだ。』

彼は私の下にもがきながら、荒つぽく答へた。

『修道院を出ろ。』

『どういふ譯でかい。』

『俺は貴さまを見るのが堪らない。出て行かなきや殺して了ふぞ。』

彼の目は血走つてゐた。そしてその目からぽた〳〵出る涙までが同じく血のやうに赤く思はれた。唇には白い泡がはねかへつてゐた。彼は私の着物を引つかき、私を抓り搔きむしり、私の顏に取つ附かうともがいた。

私はしづかに彼を搖すぶつて、それからかう言ひながら放してやつた。

『貴さまは坊主の着物を着てゐるくせに害惡で一ぱいになつてゐる。この獸め。けしからんぢやないか。』

彼は泥の中に坐つて怒鳴つた。

『さつさと行つちまへ。俺の精神を危くするな。』

私はつい先刻、彼が秘密な罪惡をやつてゐるところを愕かした。だから彼が根に持つてゐることを推察し得たやうな氣がしたので、私は全く徐に言つた。

『お前は多分、私がお前の不潔な秘密を人に言ひ附けたと思つてゐるのだらう。けどもそれなら大變な間違ひだ。私は誓ふ、だれにも言やあしなかつた。』

彼はのそり〳〵立ち上つて、一番近くの木のところへよろ〳〵と行つて、それへしつかり絡みついた。そして幹の蔭から荒々しく私を見詰めながら怒鳴つた。

『お前がみんなに話したのだつたら俺は助かるんだ。俺が公然自白をすればみんなは私を許してくれる。けれども貴さまは俺を輕蔑してる。このごろつきめ。俺は貴さまのやうな高慢ちきな異教徒から恩を着たくない。きれいさつぱりこゝを出て行つちまへ。

ぐず〳〵してると殺しちまふぞ。』

『ふん、二人のどつちかゝ出て行くとなれは、お前が出なけれやなるまいよ。私は出ないからさう思つてろ。』

彼は再び突つかゝつて來た。二人は兩方とも泥の中に倒れ込んでごろ〳〵轉がり廻つた。私は彼よりもずつと力があつた。だから私はすぐに立ち上つた。野郎は泣き面をしてその儘そこにへたばつてゐた。

『いゝかい、ミカイロ。私はその中にこゝを出て行くよ。けども今出る譯にや行かない。お前に喧嘩を吹つかけようと思つてこゝにゐる譯ぢやないんだ。ゐなけれやならないからだ。私はこゝにゐる理由が一つあるのだ。』

私は言つた。

『貴さまの親爺のところへ行け、この惡魔。』

彼はかう睨つてそれから齒がみをした。

私は彼が倒れてゐるのを放つといてこつちへ來た。四五日經つてから彼は町の庇護所

に送られた。それきり私は二度と彼を見なかつた。

十三

私は樵夫の課業をすました。そして新らしい袈裟を着て、隱室にゐる教父アントニアスのところへ行つた。この期間の私の生活は、第一日から最後の日まで、恰も私の膚に彫り刻まれ、そして頭の中に燒き込まれでもしたやうに、まざ〳〵と私の記憶の中に浮き出てゐる。

アントニアスは彼の隱室のまはりを伴れて廻つた。そして、どんな風に、いつ、どんな點に私が彼の下僕として働くべきかを徐かに敎へた。彼の室の一つには神聖な本と俗な本とが一ぱい詰つた、いくつもの戸棚がぎつしり並んでゐた。

『これが俺の禮拜室だ。』

彼はかう言つた。

その室の眞ん中には大きな卓子が据つてゐた。窓の側には贅澤な肘突椅子が置いてあつた。卓子の側には、高價な掛毛氈をかぶせた長椅子があつた。それから卓子の前には、

型をおいた柔革で張つた、背中の高い椅子が据ゑてあつた。彼の寢室には、大きな寢臺と、彼の法服や亞麻布を入れる戸棚と、手洗臺と、大きな鏡、刷毛、櫛、それから灰色をした壜が一くるみ載つてゐる化粧臺とが置かれてゐた。何の設備もない、そして醜い、彼の第三の室の壁には、二つの秘密戸棚が附け込んであつた。その戸棚は、一つの方には葡萄酒や、あらゆる種類のオール、ダーヴルが這入つて居た。そしてもう一つのには茶器一式と、料理した肉やヂャムや、すべての種類の糖果が入れてあつた。

それらの巡視がすむと、彼は再びさつきの圖書室へつれて行つた。

彼は言つた。

『椅子へかけろ。——まづ俺の生活の仕方を見たね。どうだ、餘んまり修道院的ぢやないだらう?』

『えゝ。規則に叶つてゐません。』

『お前は何事をも酷しく裁判するのが癖だから、俺にも判決を下すだらうな。』

彼はかう言つて、寺院の塔からでも微笑み下すやうに、私に向いて横風に微笑みかけ

た。私は彼の顔が綺麗なので非常に彼を愛してゐたけれど、彼のさうした微笑はひどく私を苦しめた。

『私は貴方の罪を鳴らすかどうか、それは解りませんが、とにかく貴方を了解したいのです。』

彼は實際人を侮辱した笑ひ方をした。

『お前は私生兒だつたね。』

『えゝ私生兒です。』

『お前の血管にはいゝ血が交つてゐるやうだ。』と彼は言つた。

『いゝ血ですつて？　それは何ういふ意味ですか。』

彼は笑つて、今言つた通りを稍語勢を強めて再び繰り返した。

『いゝ血といふのは、誇りを持つた性質が造られる實質だよ。』

それは光りに充ちたからりとした日であつた。太陽が窓から射し輝いて、その光線の中にアントニアスを包んだ。

と、不意に、或考へが私の頭を突き通した。そして蛇のやうに私の心臓を刺した。私は椅子から刎ね上つてぢつとこの律僧を熟視した。彼も愕いて立ち上つた。見ると彼は短劍を取り上げて弄くつてゐる。

『どうしたんだ。』

彼は聞いた。

私は彼の問ひには答へないでかう言つた。

『あなたはひよつとしたら私の父ではないでせうか。』

彼の顔は歪んでぎつくなつた。さうして氷の片からでも彫り刻んだやうに、青い色を帶びて來た。彼は目の火を隱すために兩眼を半ば閉ぢて、穏かに言つた。

『さうぢやあるまい。――だけどもお前はどこで、いつ生れたのかい？　年はいくつだ？　そしてお前の母親は誰だ？』

私がどんな風に棄てられたのだつたかを話すと、彼は微笑んで短劍を卓子の上に置いた。

『俺はそんなところへ行つたことはない。――とにかくその頃にそんなところへは――』

私は恰も施しものを請うて刎ねつけられでもしたやうな、不愉快な心持がした。

『それで假りに俺がお前の父親だつたとすると、どうだつて言ふんだい？』

『何でもありません。』と私は答へた。

『俺だつてさう思ふ。われ〳〵は二人とも肉體上から言ふ父や母のないところに暮してゐるのだ。たゞ精神上の父母があるばかりだ。つまるところわれ〳〵は世の中に對しては皆棄てられた子供だ。人生といふ苦しみの中での兄弟だ。「お前は人間といふものは單に地上の一つの偶然だといふことを知つてるかい？』

彼の眼の表情から、彼が私を調弄つてゐるのが解つた。私はさつきの奇態な亂暴な質問が呼び起した、苦痛な感情をまだ持續してゐた、そして、それを證據立てるか、それでなくばすつかり忘れて終ひたかつた。

『どうして貴方はその短劍を取り上げなすつたんです？』

アントニアスは私の顏を見た。そして輕く笑つた。

『お前はいやに下らないことを聞きはじる男だね。たゞつい取り上げたゞけだ。併しどういふ譯だかそれはよく解らない。——綺麗なものだらう？』

彼はかう言つてその短劍を私に渡した。それは鋭くそして尖つてゐた。その鋼鐵の刄には金が鏤めてあつた。束は銀で出來てゐて、紅玉石か何か、赤い石で被飾がしてあつた。

『それは亞剌比亞出來だよ。』と彼は說明した。

『俺はそれを紙切小刀の代りに使つてるんだ。そして夜は枕の下に置いとくのだ。こゝでは俺は人から金持のやうに思はれてゐる。近所には貧乏な奴が大勢ゐる。そこへ持つて來て私の隱室はかういふ風にかけ離れてゐるのだから……』

或剌戟の强い、芳烈な薫りがアントニアスの手とその短劍とから放散した。その香ひが私の脳へ上つた。

『もつと話しをしようぢやないか。』

アントニアスは眞面目な和らいだ低音の聲で言つた。

『お前は、俺のところへ女が所中やつて來るのを知つてるかい。』

『さういふ話を聞いてゐます。』

『俺の妹だといふのは嘘だよ。』

『なぜこんなことを私にお言ひになるんです？』

『一度に何もかも解るやうに、そしてどんなことがあつても愕かないやうにちやんと言つて置くのだ。　お前は卑猥な本が好きかい？』

『まだ一つも讀んだことがございません。』

彼は戸棚から赤い柔皮で裝釘した小さい本を一冊取り出して、私に渡した。

『あちらへ行つて茶沸器の仕度をしろ。　そしてこれを讀めよ。』

かう言つた。

その本を開けて見ると、第一頁に、裸體の女と、それからやつぱり裸になつた男を畫いた畫が這入つてゐた。

『私はこの本は讀みたくないです。』

私はかう言つた。

彼は私の傍へ來て、きびしい調子で言つた。

『お前の精神上の助言者がそれを讀めと命令するとしたらどうだ。　だけど、お前にはおれがさういふ譯がよく解らないんだな。　あつちへ行け。』

私は彼が私の住居に制當てゝくれた小屋の中の、寢臺の上に腰をかけて、恣に自分の悲しみを漏らした。　私は全く力が亡くなつたやうな氣がしたと同時に、體中が慄へたので、丁度毒殺でもされたやうであつた。　彼が自分の父だといふ考へは最早どこにあらう。　どうしてそんな考へが頭に這入り得たものか合點が行かない。　私には彼が靈魂について言つた言葉が思ひ浮べられた。靈魂といふものは血によつて造られるものだと彼は言つた。　それから人間について言つた事も――人間は地上の一つの偶然だと言つたのも考へ返された。それは確かに、明かな異端である。私は、彼にその質問を持ち出したときの、彼の歪んだ顔を思ひ出した。

私はその本を開けた。　それは一人の佛蘭西の騎士と或女たちとのことを書いたもので あつた。　どういふ譯で彼はこの本を私にくれたのだらう。

彼は呼鈴を鳴らして私を呼んだ。私は呼ばれるまゝに出て行つた。

『茶沸器はどこにある？』

彼は打ちとけてかう言つた。

『あなたはどういふ譯でこの本を私に下さつたんです？』

『罪惡とはどんなものかといふことを敎へてやるためだ。』

私は彼の動機を先見したと思ふと嬉しさに胸が動悸々々した。——彼は私を試さうとしてゐるのだ。

私は非常に畏んでお辭儀をして、それから向うへ行つて茶沸器を整へて彼の室へ持つて行つた。彼は已に茶をのむやうにテイブルの上を調へてゐた。

室を出ようとすると、彼は言つた。

『居ろよ。そして俺と一緒に茶をお飲みよ。』

私は彼と心安くなりたいといふ、押へ切れぬ衝動を感じたので、彼のさう言つてくれたのが心底から有り難かつた。

『お前のこれまでの身の上やこゝへ來た理由をすつかり話して聞かさないか。』

私は自分の生涯の話をすつかり彼に話し出した。そして、話すに足りると思ふほどの考へや衝動は、一つも隱さないで話した。彼は目を半分閉つて、ぢつと耳を傾けた。そのために彼は茶を飲むのを忘れて了つた。

月が彼の後の窓から覗き込んだ。そして木々の黑い枝が、空の赤い背景の上に浮彫のやうに浮き出て見えた。私は話しをしながら、同時に、この律僧が胸の上に組み合はせてゐる白い手を見詰めた。

話を了へると、彼は私に、或、黑い甘い葡萄酒を一杯ついでくれた。

『お飲みよ。』と彼は言つた。

『俺はお前が敎會堂で大きな聲で祈りを上げてゐたのを見て面白い男だと思つた。修道院の生活は、お前のやうな苦悶には大した慰安になりさうもないね。』

『さうぢやありません。私はあなたが助けてくださるといふ、大きな望みを持つてゐます。あなたは學問のある方だから、必ず、どんなむつかしい事にも一々助言して下さる

ことが出來るにきまつてゐます。』

彼は穏かに、私の顔を見ないで言つた。

『俺はかういふことだけたつた一つ知つてゐる。それは、假りにお前が山を登りかけてゐるとすると、お前は眞直に絶頂へ向けて上らなければならない。そして、もし落ちるとなれば、そのときには谷底まで落ちるのだ。俺は怠惰けものでそんなことは得しないから、實のところ自分ではこの規則を守つてゐやしない。マトヴェよ、人間といふものは哀れなものだ。どうしてかう情ないものでなくちやならないのかわけが解らない。人生といふものは、實に華麗なものだ。そして世間にはいろ〳〵人を引き付けるものがある。それこそさま〳〵な歡樂が人間に開放されてゐる。それでも人間は哀れなものだ。この先も永久にさうだ。それはなぜか。これは俺には解けない問題だ。のみならず、私は、そんなことを立ち入つて考へようとも思はない。』

晩禱式の鐘が鳴つた。彼は立ち上つて言つた。

『では平安に向うへお行きよ。俺は疲れてゐても、厭でも禮拜式の手傳ひをしなけりやならない。』

私が氣が利いてゐたなら、そのとき即座に彼を見捨るところであつた。さうすればともかく、彼について氣持のよい回想を持ち去る譯であつた。けれども、私は彼の言葉の本當の意味を掴まなかつた。

私は、自分の寢臺へ行つて、その上で手足を伸ばして休んだとき、彼が貸してくれたさつきの本を見出した。私は蠟燭を點した。さうして全く、自分の精神上の助言者に對する感謝から、それを讀みはじめた。

讀んで見ると、例の騎士は、いつも男を騙しては、夜そいつらの女房を待ち伏せするのであつた。亭主たちは彼を係蹄にかけて、短劍で突き刺さうとする。けれども騎士はそのたんびに、しまひにはどうにかして甘く逃げて了ふ。こんな事は私には一寸も面白くないし譯も解らなかつた。或は寧ろ私は、若い男はそんな惡戯をすることに愉快を見出し得るものだといふ意味にそれを理解した。けれども、だれにしろ、どうしてこんな事を本に書けるのだか、また、なぜ私がかういふ何にもならないやくざなものを讀まなければならない。』

ならないのかといふ譯がよく解らなかつた。

私は再び、本當に自分はどうしてアントニアスを自分の父ではあるまいかと思つたのか、それを自分自身に質問した。この考へは、丁度錆が鐵を腐蝕するのと同じやうに私の心を嚙んだ。そのうちに私は寢込んだ。

私は寢入つてゐて、だれかゞ私の脇腹を叩くやうな氣がした。で、目をさまして飛び起きて見ると、それはアントニアス彼自身であつた。

『さつきから幾度呼鈴を鳴らしてゐるか知れないぜ。』

『すみませんでございました。どうかお許し下い。非常に働いたものですから。』

『それは知つてるさ。』

彼はかう答へて、

『神よ爾を守れ。』とつけ足した。

『俺はこれから僧院長のところへ行くのだ。お前は俺が敎へて置いた通りにお前の任務に取りかゝれよ。おや、あの本を讀んだね。だけどお前の言つた通りだ。あれはお前

に向く本ぢやない。讀みはじめてくれなけやよかつた。お前にはもつとほかのものが要るのだ。』

私は彼の床を取つた。彼の敷布や白い上掛は嘗て見たこともないやうな高價な材料で出來てゐた。そして、それらのものにはいづれも、芳烈な、薫りのいゝ香料が浸み込んでゐた。

私はそれからといふものは、人を醉はすやうな霧の中に、夢の中でのやうに生活し出した。私の目にはアントニアスのほかには何ものも這入らなかつた。彼は薄暗い中に、屈接されたものゝやうにのみ思へた。私には理解の出來ない二重影像のやうに見えた。

彼は常に親切に話しかけた。けれども私は彼の眼の中に反語的な輝きが閃くのを認めた。神といふ名前は滅多に彼の唇には上らなかつた。彼は『神』といふ代りに『靈』といふ言葉を使つた。そして『惡魔』といはないで『自然』といふ言葉を代用した。けれども、名前は變つてゐてもその意味は私には同じであつた。彼はいつも、律僧や宗敎上の儀式について一寸した冗談をよく言つた。

彼は酒を澤山飲んだ。併し私は彼がついぞひよろつくのを見たことがなかつた。たゞ額が青白くなつて來て、眼の中に悲しい光が輝き、唇の赤い色が濃くなつて、稍青ざめた透き通つた頰から、常よりもずつと、さは立つて曲り出るだけのことであつた。彼は所中夜中や、またはもつと遲く院長のところから歸つて來て、私を起して酒を運ばせた。そんなときには、彼は坐つて、例の沈んだ聲で止み間なく話しつゞけた。早い朝の鐘が鳴るまで話すことも度々であつた。

彼の話は六づかしくて私には意味が取れ悪かつた。それに大部分はもう忘れて了つた。けれども彼の言ふことが初めには私を愕かしたのを記憶えてゐる。それらの話は、この地球の表面に生きてゐるあらゆるものを吸込む、深い奈落を開きあけて行くやうに私には思はれた。ときには彼の話は、非常に變に私を陰鬱にしたり、ひどく心を沈ませた。

『つまり貴方は……惡魔ぢやないでせうか。』

私はかう言つて叫んだ程であつた。

彼は全く陰黑であつた。そして非常に權式張つて話した。彼が醉つぱらふと、二つの

目が、言はゞ顏の奥へ引つ込んで、さつぱり分らなくなつた。微笑が引つきりなしに彼の青ざめた顏を閃き通つた。そして彼の長い華奢な指は、青黑い口鬚を弄具にして、交互に披げたりつぼめたりした。そして或冷たい雰圍氣が彼から發散して來るやうな氣持がした。それは全く怖かつた。

前にも言つた如く私は惡魔の存在を信じない人間である。私は聖書を讀んで、惡魔といふものは非常に傲慢で、爭鬪が好きで、常に人間を誘惑しようとかゝつてゐるものだといふことを敎はつた。けれども、敎父アントニアスには、氣質に少しも奸詐がましい點を見出さなかつた。彼は人生を灰色で描いた。そして人生がいかに不合理であるかを私に敎へた。彼は人間といふものはめい〳〵いろんな速力で深い淵を突き下りて行く、怒り狂つた豚の群のやうに思つてゐた。

『でもあなたは、人生を非常に輝きのあるものだと仰つたぢやありませんか。』

私はかう答へた。

『それはさうさ。——俺の期待どほりに行けばだ』

彼は冷笑を浮べて附け加へた。

かう言つたやうな色んな會話のなかで、私は今は只その笑ひ方を記憶してゐるばかりである。何だか彼は、到るところから追ひ拂はれて來でもした人のやうであつた。そして、今は自分が放逐されたことをさほど怒りもしないで、あらゆるものを侮つてゐでもするやうであつた。彼は細かく頭の働く思索家で、彼の問題をどん底まで探り査べた。併し私は彼の智識の勇敢な戰鬪のために、まくし立てられたことは幾度もあつたけれど、彼は嘗て私を說き伏せることには成功しなかつた。

滅多にはなかつたが、時によると、彼は怒り出すことがあつた。その時には彼は大きな聲で私に怒鳴りかけた。

『俺は貴族だぞ。或る立派な種族の血を引いてゐるのだ。私の祖父や曾祖父は露西亞王國を建設した。歷史は彼等の名前を記錄してゐる。それにこの馬小屋小僧は俺の言ふことを遮りやがる。併しさういふのが世間の奴の癖だ。美しいものは破壞され、汚れた惡者ばかりが生き遺つてゐる。そいつらの中に、孤獨な貴族がたつた一人ゐるきりだ。』

かういふ風な言ひぐさは私は好かなかつた。私だつて、ひよつとしたら非常ないゝ家筋から出てゐるのかも分らない。けれどもそんなことが人一人に何の役に立たう。本當に重要なのは、たゞ實際の事實である。

時々彼は、肘突椅子にかけて、青白い、血の氣のない顏をして、よくこんなことを言つた。

『坊主どもがまた骨牌で俺を挖り取つたよ、マトヴ。一たい律僧とは何だ。彼は世間の人間たちが恐ろしさに、そいつらに自分の卑劣を隱さう〳〵としてる奴だ。でなくば、自分自身の弱點を苦しいほど自覺してゐるために、世間から滅されないやうに世間を遁れてゐる奴だ。この後の部類のものはうぢや〳〵ゐる律僧の中で一番いゝ、一番興味のある人間だ。あとの奴等と來たら單に家のない賤民だよ。この地上の塵だ。地上の死胎兒だ』

『ではあなたはどういふ人です。』と私は聞いた。

私はぶしつけに、少くとも十度はこの質問を持ちかけた。

『お前は今でも偶然が生んだ子だ。これからも永久にさうだ。』

彼はいつもこれだけの言葉で以て意味の多い返事をした。

彼の神は私にはやはり一つの神秘であつた。私は彼が眞面目なときに、彼からそれを段々と引き出さうとかゝつた。すると彼は、いつでも、或陳腐な聖書の本文を例に引いて笑ひながら答へた。私は自白する。神は聖書以上のものだ。私は次には彼が醉つばらつてゐるときに同じ質問を持つて肉薄した。けれども彼は醉つてゐるときでも本音を吐かなかつた。

『マトヴ、お前はずるい奴だ。ずるいと同時に頑固だ。これはお前のために全く氣の毒なことだ。』

『氣の毒なのはお前さんだ。』

私は、彼の光彩ある知識的の天質が——私が貴ぶことを知つてゐた天質が——彼の隱室の中で段々に亡びて行くのを、彼は平氣でほつてゐるのを見ると、一人心にかう考へた。

けれども私は段々と執固くいろんな質問をかけて彼を探り究めることを止めなかつた。

すると彼は或日、半ば不承〳〵にかう言つて、彼の無智を自白した。

『マトヴよ、俺には神についてはお前以上のはつきりした考へは何にもない。』

『私は實際のところ、自分の心に神の形をはつきり考へ畫くことは出來ません。併しそれでも私は神を意識してゐます。私は神がゐるゐないを聞いてるのぢやありません。私がお聞きするのは人生の基本となつてゐる掟を、われ〳〵はどう解釋すべきものか、それを聞くんです。』

私はかう答へた。

『さういふ掟は敎會條規の本を見れば書いてあるさ。お前が本當に神の存在を感じ得るなら祝つてやる。』

彼は私に酒を注いで、自分の盃を私のとかち合はせて、ぐいとそれを飲み干した。

私は、彼の顏が死體のそれのやうに眞面目な時でも、眼にはやつぱり嘲弄的な微笑を帶びてゐるのを看取した。

彼は、いろんな場合に、自分の生れの氣高いことを、私が全く情ない氣持がしたくらゐ

自慢した。けれども、私は實のところ、そのときには全で彼に目がくらんでゐたので、彼の虚榮心を一つの德性のやうに考へてゐた。

彼は醉ふと、女の話をするのが大好きであつた。

『自然といふ奴は、女といふ最も誘引的な餌で以て、しつかりと、奸惡にわれ〳〵を縛りつけてゐる。肉慾の誘惑といふものがなかつたなら、人間は恐らく永久の生命を得るかも知れない。人間の最も鋭利な智力がこの肉の誘惑の犧牲にされてゐる。』

兄弟ミカイロも、この問題についてはこれと同じやうな、併し、まだずつと野鄙な言葉を使つて自己を表白した。だから私はそんな說を聞くのが厭でたまらなかつた。ミカイロは女性全體に對して狂へる怒りと怨みとを以て怒鳴り散らしたので、アントニアス敎父の言つたことは冷やかで氣のないやうに見えた。

『お前は俺が讀めつて貸してやつたあの本を記憶えてゐるかい？　あれを讀んでゐたら、女の根性がどんなにずるく、虚僞りで、そして不埒なかといふことがお前にも解るのだけれど。』

私は彼の話を聞いて、男が女から生れ、女の乳で養はれておきながら、自分自身の母に泥を投げつけたり、自分の母のすべての行ひを淫慾に歸して彼女の價を貶したり、そして、愛の權化である自分の母を、それで以て、理性のない獸にして了つたり出來るのに愕かれ、且つ厭であつた。

私はこの問題に就いての私の考へを彼に話した。それも彼が言つたのよりも穩かな言葉で、且つあれほど無作法でなく。ところが彼はくわつと怒つて怒鳴りつけた。

『馬鹿ッ。——俺の母のことを言つてるんだと思ふのか。』

『女はだれだつてみんな母になるのが運命です。』

『だつて、一生猥らな淫亂者で通す女はいくらもある。』

『世間には背蟲の人間がゐます。けれどもみんなが一人々々背蟲を背負はなけりやならないのぢやありません。』

『地獄へ行け、このくそ馬鹿。』

彼には士官時代の癖がまだ亡びないでゐた。

十四

私は色んなときに、アントニアスと殆ど撲り合ひをやりかけた。神について質問をすると、彼は言ひ抜けの嘲弄をやる。それが堪らなく私を激させた。或晩には私はもう少しで私の激憤を飛ばしつけるところであつた。激昂は私を悲しくさせた。物事の本質を發見しようとする熱望の下に、私は殘酷しく苦しんだ。私は飢ゑた人間が食料品を賣る店の——そこでは、欲求が滿たされないときには麵麭の匂ひが狂氣の縁まで苛立たせるやうな——さういふ店のぐるりをうろつくやうに、アントニアスの周圍をうろついた。

今言つた晩には、彼はいろんなことを諷刺して、私を怒り狂ふほど刺戟した。私はテイブルの上にころがつてゐた短劍を掴んで怒鳴り立てた。

『物事に對するあなたの意見を正直に話して下さい。でなけや私はこの喉を掻き切ります。何が何だつて構はない。』

彼は非常に愕いて私の手を捉へた。そして短劍を捩ぢ取つた。私は自分の狂氣じみた

行ひが彼に深い感銘を與へたことを認めた。

『お前は當然こんな事をした罰を受けなけやならないのだが、併し狂人なら、罰を加へたつて何の役にも立たない。』

かう言つて彼は、一つ〳〵、私の頭へ釘を打ち込みでもするやうに話した。

『ねおい、俺の言ふことをよくお聞きよ。眞實な眞正な物といへばたつた一つしかないんだ。それは卽ち人間だ。そのほかのものはみんな想像した事柄だ。お前の神はたゞお前の心の夢に過ぎない。お前が知り得るものは全くお前自身しかない。併もそのお前自身ですら完全には解らないのだ。』

私から何物をか剝ぎ取りでもするやうな彼の言葉は、暴風雨のやうに私の精神をぶち壞した。彼は非常に長いこと話した。私は彼の言ふことが解つたやうで、同時にまた解らなかつた。私にはこの男が、悲しみも喜びも、怖れも誇りも苦さも知らないやうに感ぜられた。彼は私の目には、墓に臨んで葬歌を唱へる年取つた墓地僧のやうに見えた。彼の言つた言葉は彼の唇には俺くまで親しくても、彼の靈に取つては全で見ず知らずのもの

であつた。最初は彼の言ふことは聊か驚かれもしたけれど、それがみんな死んでゐるのだから、後には彼の疑懷は少しも危險のないものゝやうに思はれた。

それは五月の月のことであつた。窓が開いてゐて、庭園から來る穩かな夜の空氣が花の香をふうはりと室内に運んで來た。林檎の木は、若い娘たちが最初の聖晩餐式に出かけて行く途中のやうに、光つた花の揃ひ着を着て輝いてゐた。夜番が聲高く時間を知らせた。そして銅板を叩く音が靜かな夜の中に反響した。私の眞ん前には氷のやうな顔をした人が坐つて、無效な空つぼな言葉を吐いてゐた。彼の唇から、灰のやうに毫うけて落ちて來る空虛な言葉を。

私の心は全く困惑した。黄金を探したのに、たゞびか〳〵するばかりの價値もないものを見得たのみだからであつた。

『あつちへ行け。』

アントニアスはかう私に言つた。

私は庭園へ下りて行つた。そして朝の禮拜の鐘が鳴ると禮拜堂へ這入つて、暗い片隅

を選んで默想をはじめた。

『半分死んだ人間が神と何の關係があるだらう。』

律僧たちが群つて通つた。黑い禮儀服を着た彼等は、月の光りに碎かれた、夜の壞れのやうに見えた。彼等は音もなく歩いて行つて、禮拜堂へ這入つて彼等の座席に附いた。何故だか今に私には解らないけれど、アントニアスはそれ以來、私と話をする際に横風な優者らしい調子を裝うた。彼は、陰鬱な、興味のない容子で私に話しかけた。そして彼の隱室へ私を招き入れるのをやめてしまつた。それから私にくれた本をみんな返せと言つた。その本の一つは露西亞の歷史であつた。私は非常な驚異を以てそれを讀んでゐた。けれども、それを讀み了ることを許されなかつた。

私は、どうして自分の親切な主人の氣を惡くしたのだらうかと熟考した。けれどもその理由を推度することが出來なかつた。

俳し彼の言つた言葉は私の心に固着した。その言葉は、すべての他の言葉より擢んで、すべての言葉から離れて、それ自身の靜かな生存をそこに送つた。

『神はお前の心の夢だ。』

私はこれを一人心に繰り返した。けれども私はさういふ考へと闘はなければならないやうな壓迫を感じなかつた。實際私には、それが妄見であるといふことが解り切つてゐるやうに思はれた。

間もなく彼の色女が登場した。そのときはもう夜も遲かつた。アントニアスが呼鈴を鳴らして、

『早く湯沸器を持つて來い。早く。』と叫ぶのが聞えた。

湯沸器を下へおいたときに、私は、刺し縫ひをした薔薇色の着物を着た一人の女が、長椅子にかけてゐるのが目に這入つた。その肩の上には黄色い髪が、亂れた一塊になつて垂れかゝつてゐた。

女は人形のやうに小さい體をしてゐた。顔には紅をつけてゐた。その青い二つの眼は、憤ましく、且つ或嚴かな容子を帶びて私を凝視した。

私はコップと、臺皿を卓子の上に置き並べた。けれどもアントニアスを滿足させるだけに早くは行かなかつた。

『おい〳〵早くしろ。手早くしろ。』

アントニアスはかう叫び續けた。

『ふゝん、まづこれでたつた一度だけ、昂奮した、いゝ狀態を見せたな。』

私は心にかう思つた。

私はこの小さな、戀の喜劇を見て面白かつた。ともかくこれで以て、アントニアスが、他の事は何んにも出來ないにしても、女を拵へることは出來るといふことが證據立てられたからであつた。それも、たしかに、たいした敏捷を要求する仕事ではない。私は、この時代には、女に關しては氷のやうに冷やかであつた。私は律僧たちの腐敗を見ると胸が惡くなつた。けれどもアントニアス敎父は、私の目には、外の何であらうとも、律僧とだけは思へなかつた。

その女は一寸綺麗であつた。そして買ひたての玩具のやうに新しかつた。

翌る朝、アントニアスの室を片づけに行つたら彼はゐなかつた。實は僧院長のところ

へ行つてゐるのであつた。併し女は手に本を一冊持つて、髪を亂し、兩足を組み合はせて、長椅子の上に坐つてゐた。且つほんの半分着物を引つかけてゐるばかりであつた。

女は私の名前を聞いた。そしてこの修道院にいつから來てゐるかと尋ねた。私はそれに一々返事をした。

『こんなとこにゐちや飽き〳〵しやしないの？』

『いゝえ。』と私は答へた。

『それが本當なら、隨分をかしな話だわね。』

『だつて本當でさ。』

『お前さんはずゐぶん年も若いし顏も綺麗だのに。』

『寺だつて片輪ばかりゐなくてもいゝでせう？』

女は急に吹き出して笑つた。そして裸のまゝの片脚を長椅子から床へすべり下させた。そして同時に私をじろ〳〵見つめて全く變な眞似をした。それから裸の手を肩のところまで曝し出した。着物の、上の方のボタンはかける必要もないと思つてゐるらしかつた。

『そんなことをしたつて私に對しては無駄なことだ。そたよりか、お前の美しいところをしまつて置いた方がいゝよ。』

私はかう思つた。

と、その小さなばかものは言つた。

『お前さんは娘を見ても平氣なの？』

『私は娘は一人も見やしません。女子を見たつて興奮する譯もないぢやありませんか』

『なぜ？ほゝゝ。』

と女はくす〳〵笑つた。

『興奮する譯がないんですつて？』

かう言つてる瞬間にアントニアスが這入つて來て、怒氣を含んで言つた。

『どうしたんだい？ゾー、え？』

『まあね、その若い男がそれは滑稽なのよ。』

女は大きな聲でかう言つた。それからべちゃ〳〵喋つて、私がこの女を面白がらせたことを彼に話し出した。けれどもアントニアスは女の言つてることには耳も貸さないで、私にあちらへ行つて函や容れものゝ上包みを解けとふてた調子で言ひ附けた。

『この食料品を少し院長のところへ持つてかなくちやなるまい。』

午飯のときにはアントニアスと女とは、二人とも隨分飲んだり食つたりした。夕方茶の後で、女はひどく醉つてゐた。アントニアスは不斷よりも餘程うんと飲んだらしかつた。私は、これを持つて來いの、あれを取つて來いの、行つて酒を暖めて來い、やれ冷して來いと無暗にそつちこつちへ追ひ立てられた。全でホテルのボーイのやうに行つたり來たり走り廻つた。二人は夜が更けて行くにつれて、段々と私が目の前にゐるのが平氣になつた。女は暑いといつてぶつ〳〵言ひながら、段々に着物を脱ぎ出した。

と、私の主人が不意に叫んだ。

『どうだ、マトヴ、この女は綺麗だらう?』

『仰しやるまでもありません。』と私は答へた。

『さ、よく見ろよ。』

女はひどく醉つてゐて、笑ひやめようにも止まれなかつた。私はその場をはずしたかつた。けれどもアントニアスは私に怒鳴りかゝつた。

『どこへ行くんだ。ゾーよ、おい、お前着物をぬいだ恰好をこいつに見せてやりな。』

私は自分の耳が私を欺いたのだと思つた。けれども女は化粧着を引つぱがして、よろめきながら立ち上つた。私はアントニアスの顏を見た。彼も私を見た。私の心臟は苦しい動悸を打つた。私は自分の主人のためにずゐぶん氣の毒に思つた。彼はどうしたつて一個の紳士に生れて來た人である。こんな下卑たことは彼には似合はなかつた。私はその女のために恥しい氣持がした。

と、彼は私に向つて怒鳴つた。

『あつちへ行つてしまへ。この百姓の豚。』

『あなたこそ豚だ。』と私は叫んだ。

彼は飛び上つて、乘つてゐたいろんな壜ぐるみに、テイブルをひつくり覆した。土器

はがちやんと床に落ちた。そして何かしら、彼の後に、黑い流れになつて流れた。

私は庭へ出て横臥した。私の心臟は霜やけになつた手足のやうに苦痛に惱まされた。すべてのものが沈默に包まれてゐた。けれど、間もなくアントニアスが隱室で怒鳴つてゐるのが聞えた。

『出ろ。』

すると女はすゝり泣きをしながら答へた。

『外へ聞えて御覽なさい、ばかな人。』

次に馬車へ馬をつけるのが聞えた。それから私の耳は、いら立つた馬の嘶きと、堅い土の上をかた〳〵させる騷がしい蹄の音を捉へた。いく〳〵つかの戸が騷々しく開いたり閉つたりした。馬車の車輪が轟いた。そして外塀の門の蝶番が軋る音を立てた。

『マトヴはどこにゐる。』

アントニアス敎父は大きな聲で呼びながら庭を歩き廻つた。

黑い僧服を着た彼の丈高い姿は、林檎の木の間を、そろ〳〵向うへ動いて行つた。彼

は枝を掴んで、

『待て、……ばか。』と叫びながら、匂ひの高い花の雪をさら〳〵と地面へ落した。彼の後には、彼の幅の廣い黑い影が地上に引き摺られて行つた。

私は早朝まで庭にころがつてゐて、それから敎父イシドーアのところへ行つた。

『どうか私の旅行券を返して下さい。——私はこゝを出るんです。』

私はかう言つた。

『なぜ？　何處へ行くつもりだい？』と彼は聞いた。

『どこへ行くのか、どこから來たか、私にはまるで解りません。』

彼は續いて色んなことを聞いた。

『もうそれ以上話することはありません。』と私は言つた。

私は彼の隱室を出て、或古い松の木の下のベンチに腰をかけた。そこは外見上、いつもこの修道院から出されるものや、自分から出て行くものが、そのことを他のものに知らせるために、腰を下すところになつてゐた。それで私はわざ〳〵そこに坐つた。

兄弟たちが側を通つて私を流し目に見て行つた。彼等の多くは私の前を通り過ぎると
きに唾を吐いた。
言ひ忘れたが、實は私とアントニアスとの關係が甚だ潔白でないといふやうな風評が立
つてゐた。見習僧等は私を嫉んだ。併し律僧たちは私の主人を嫉んだ。そして彼等はど
ちらも、私たち二人の上に讒謗を浴びせた。
『はッはッは。叩き出されやがつたな。――いゝ氣味だ。』
兄弟等は私の側を通り過ぎながらかう言つた。
教父アサヴは、飽くまで根性の惡い、小さい老爺で、修道院ではいつも院長の密偵をつ
とめ、その上、信心家を裝つた半馬鹿の役を演つてる奴であつたが、こいつが私に向つて
不都合な罵詈讒謗を投げつけた。
『私の歩き道を退いた方がいゝぜ。ぐず〳〵してるとその耳を引つ張つてやるぞ。』
私はしまひにはかう言つて怒鳴りつけてやらずにはゐられなかつた。
彼は半馬鹿だけれど私の威赫が解つた。

道院長が私をよびによこした。そして親切に言つた。
『私は、事務所へ這入る方がいゝだらうと言つてちやんと前以て警告して置いたらう。
どうだ、私の言つた通りぢやないか。いつでもかうなんだ。年上の人のいふことを聽
かなけやいけない。お前のやうに人を何とも思はないやうな精神ではどうしたつて平人
僧が勤まりつこはない。お前はあの教父アントニアスさんを飛んだ目に侮辱したものだ。』
『あの人がさう言ひましたか。』
『無論だ。お前はその事については何にも言やしなかつた。』
『あの人は裸の女を私に見せてくれた話をしましたか。』
かういふと、道院長教父大尊師は私の上に十字の印を切り浴びせ、私を惡魔的な或物と
して防ぎ止めようとでもするやうに、信仰深い恐怖を以て兩手を擴げて叫び立てた。
『何を言ふんだ。默らつしやい。女だなぞと！お前は夢を見てゐたんだ。お前の罪深
い肉慾の結果だ。恐らく惡魔の誘惑だ。何をいふんだらう。愕いてしまふ。女が修道院
へ這入れる譯はないぢやないか。』

私は彼を取鎮めようと試みた。

『昨日あなたのところへポルト葡萄酒や乾酪や魚卵鹽漬を持つて來たのは誰です？』

道院長はます〳〵面喰つた。

『何といふたはけた事をいふのだ。基督がお前を守護して下さることを祈る。どうしてお前はそんなをかしな拵へ事が言へるのだらう？』

十五

こんな事は私には全く厭であつた。それは私を狂人にするのに充分であつた。

午時分に私は湖水を横ぎつて土手の上に坐つた。そして自分が二年といふ長い間、あんな辛い荒い仕事をした修道院をちつと見下ろした。

翼を擴げた青々〳〵した森は、その胸にかくれてゐる修道院を敎へ示して横はつてゐた。その繁つた青葉の間から、ぎざ〳〵のついた白壁と、古い禮拜堂の青い圓屋根と、人間が神に建て捧げた新しい寺院の、金箔をなすつた半球形の屋根と、それから屋根の赤い筋目とが、くつきりと區劃を見せて横はつてゐた。すつかりの十字架がぎら〳〵して、心を引くやうに輝いてゐた。その頭上には、天の青玉の鐘が、歡ばしい春の讃美歌の中に鳴り響いた。そして太陽はその勝利を誇つた輝く光りの中に歡喜してゐた。

人の心を狂喜で一ぱいにする、この華やかな飾りと美しさの中に、長い黑い服を着た人間がゐるのだ。彼等は穴の中や隅々に蹲つて、汚ない塵屑と無意味な勞働との間に、

戀もなく歡樂もなしに、つまらない月日を送つて朽ちて行くのであつた。

私は彼等のすべてを憫れんだ。私自身もを憫れんだ。私はもつとて泣き出すところであつた。

私は立ち上つてそこを去つた。

空氣は非常になつかしく匂つた。大地の全體と地上のあらゆる生きものとが歡び歌つた。太陽は野にあるすべての花を芽ぐませた。彼等はそのこゞまつた頂飾を空にもたげた。木々は、若々しい綠色の揃ひ着を着て、眸き搖らいでゐた。鳥は囀つた。すべての造化物が愛を以て輝いてゐた。實りの饒かな、茂り昌へた大地は、歡喜に醉うて横たはつてゐた。

私は一人の百姓に出會つて今日はと挨拶をした。けれども彼は殆んど私の挨拶を受け入れなかつた。それから一人の女に出くはした。けれどもその女は私を避けた。私はだれか人間に話しかけたくてたまらなかつた。それこそ親切に話すのだのに。

私は自分の自由の第一夜を森の中で送つた。そして兩眼を空へ向けて眠つた。

曙る朝早く寒さのために目がさめた。そして翼を擴げ伸ばして、充實した人生に出會ふために歩いて行つた。一足々々は、向うへ〳〵と私を行く手に運んだ。私は走り出さうと構へてゐた。走つて遙か向うの目的地に行きつく構へをしてゐた。

私に行き會ふ人々は、うろん臭さうに私を見た。それは、律僧の黑い服裝は、百姓たちには厭はしい、全く嫌でたまらないものだからであつた。けれども私は私の旅行劵の效力が切れてゐたので、その服を脫ぎ棄てることが出來なかつた。道院長が、私の旅行劵の裏へ、これは自分の修道院の見習ひ僧で、方々の聖場を巡禮するものだといふことを書いてくれてはゐたけれど。

そんな譯で私は、私のゐた修道院へ祭の日に何百人といふ群になつてよくやつて來たやうな、さういふ同じ種類の人間たちと一緒に、いろんな聖場へ巡禮した。

僧侶たちは、これらの人々を、實際のらくらものとして、冷淡や又は敵意を持つて取扱つた。彼等はさういふものたちから最後の銅錢を搾り取つた。それから無理やりに修道院の荒い仕事をさせたり、あらゆる仕方で彼等を利用し、その上に侮辱した扱ひ方をした。

私自身は當面に自分の仕事を持つてゐたので、それらの浮浪者とは殆ど交際しなかつた。そして何等の知己をも求めなかつた。自分の求めと目的とで以て、他のものたちよりか頭と肩だけ抜き出てゐるものと自認してゐた。

私はすべての本道と横道とに、それらの灰色な姿をした連中が、手に杖を持ち、脊中に道具袋を背負つて、急がずに、併も元氣に充ちて、よた〳〵と歩いて行くのを見た。彼等は正直でそして神聖な自信に充ちて、頭を垂れ、謙讓な瞑想に耽つてゐた。彼等は共に泣き、あらゆる物を凝視し、默つて祈りをした。そして何かかにか小さい仕事をした。神聖な人だとの評判ある僧侶がゐると、彼等はその人と話を換はした。そして また別れて、どこかの新規な巡禮場へ向けて悲しく歩いて行つた。

こんな風にして彼等は、老人も若いものも、女等も子供等も、みんな或一つの聲に推し促されでもしたやうに、それからそれへと靈場巡りをして行つた。私は街道をたどつて行くこれらの間斷なき遍歴に於て、或一つの力を——私の心を引きつけたり搔き亂したりしながらも、それでも何物をか約束してくれる或力を感じた。私は一つところにばか

りゐる生活をした後だつたので、こんな休みのない謙虛な流浪をするのが奇態に思はれた。

それは丁度、大地といふ母が、彼の女の胸から人間を引き退け、突き放して、威風ある聲で、

『行けよ、質せよ。かう言つて叫んでゐでもするやうであつた。そして事物の本性を知れよ。』

そして人間はちやんと素直に、かしこく自分の道を探りながら、尋ね求め、眺め入り、ぢつと傾聽して、それから再び彷徨ひを續ける。全き大地はそれらの漂泊者の足踏みの下に反響して、常に彼等を先きへ〳〵と押しやり、彼等を強ひて川や山や森や海やを横切つて前進させるのである——奇蹟のかてのある、淋しい修道院のあるところや、この狹い、辛い、殘酷な、われ〳〵の日常生活より他の何物かの望みが、力を働かせてゐるやうなところへ一々殘らず押しやるのである。

私はこの、淋しい人々の、沈默な惑ひに感動して、段々と人間といふものに接近するやうになつた。私は人間が何を求め探してゐるかといふことが解り出した。そして私のぐるりのすべてのものが、私自身と同じやうに、ぐらつき迷うてゐるやうに思はれた。

多くのものが私が求め探したやうに神を求めた。けれども、私と同じやうに、どこへ向けて自分自身を運んで行くべきかを知らなかつた。彼等は自分の求めに導かれて行く途中で彼等の心を浪費し惱ませた。彼等は立ち止まる力がないために漂浪を續行した。風に漂ふ絲遊のやうに、うか〳〵と、あてどもなくうろつき廻るのであつた。

中には、自分の懶惰に打ち勝つことが出來ないで、背中で持つて躊り歩いて行き、自分の品性を下げ、そして嘘を吐いて生きてゐるものもあつた。けれどもまた中には、あらゆる物を見ようといふ願ひに充ちてゐても、何物をも溺愛する力を持たないものもゐた。

私はこれらの巡禮者の中に、餘計なあふれものが澤山ゐるのを見た。極惡なごろつきや、虱のやうに蹇くことを知らない破廉恥なのらくら者がいくらもゐた。併しこんなのは單に神を探し求める人間の焦燥に捉へられた人たちの、群集の後に立ちあがる塵煙に過ぎなかつた。

そしてこの群が抗むことの出來ない力で持つて、私をその跡へつけて引きずつて行つた。けれども彼等のぐるりには、河の上の鷗のやうに、人間の種族の、羽根のある、あらゆる

種類の奴たちが、叫び聲を放つて、貪慾にまひ〳〵してゐた。私はそいつらの醜いざまを見て呆れ果てゝ了つた。

或時私はピエロオゼロで一人の活潑な、きれいな身裝をした男に出會つた。彼はどう見ても中年としか見えない、相當な境涯にゐる人間であつた。

彼は或木の蔭に立つてゐた。そして傍にはすべての種類の襤褸切れや、膏藥の壜や、銅の鉢を持つてゐた。彼は時々叫び立てた。

『みなさん、さあ皆さん。だれでも足を使ひ過ごした人や、できものを煩つてる人がありましたらよこして下さい。私が直して上げる。私は誓ひをしてゐる。それで基督のために無料で直して上げるのだ。』

それはピエロオゼロの大祭のときであつた。巡禮者が、諸方から群をなしてそこへ集つて來て、この男を取り卷いて坐り、てんでに自分の足の襤褸切れを解きはなした。さきの男はその腫れ物を洗つて繃帶して、それから一場の敎訓をして聞かせた。

『おゝ、わが兄弟よ。お前さんは何といふ馬鹿な人だらう。お前の木皮靴はお前さんに

大き過ぎる。そんなものを履いてどうして歩けるものか。』

けれども木皮靴をはいてゐるその人は答へた。

『人が施し物にくれたんだ。』

『それをお前さんにくれた人は、神のお喜びになる仕事を一つした譯だ。けれどもお前さんに取つては、そんな靴を履いて歩くのは勇士らしい行ひではない。たゞばかげたことだ。神さまはそんなことをしたからつてお前さんを賞めて下されやしない。』

『神さまのお考へをよく知り拔いてる男がゐらあ。』

私は心で獨り言を言つた。

女が一人跛を引きながら彼のところへやつて來た。

『おや〳〵、お姐さん、これはたゞの疣ぢやない。さう言つちやすまないがこれは天然痘だよ。天然痘といへば人にうつる病氣だ。家中のものが皆なそれで以て死んだ例がいくらもある。それくらゐ惡性な病氣だよ。』

哀れな女は困惑に蔽はれた。併し立ち上つて、斜つ向きながら行つて了つた。けれど

もさつきの男は大きな聲で呼び續けた。

『みんさん、こゝへ入らつしやい。聖シリルの御名の下に。』

巡禮者たちは彼に近づいて、頻りに呻きながら靴を脱いだ。例の男はその傷を洗つてやると、

『基督がお前さんをお救ひ下さるやうに。』

かう祈つて彼等を去らせた。

けれども私は、彼の立派な顏がひきつけるやうに捩ぢれたり、彼の熟練した手が慄へたりするのを見た。

間もなく彼はその施療所を閉つて立ち去つた。

夜になると、一人の律僧が私をある小屋へ伴れて行つた。見ると、例の、膏藥を持つてゐた男がそこにゐた。私はその男のぢき側へ寢ころんで、小聲で言つた。

『どうしてあなたは、こんなところで賤しい人たちと一緒に泊るのです？　あなたの身裝から言へば宿屋の方がもつと似合つてゐやしませんか。』

『私は全三月の間低い人間の中の一番低い人間になるやうに誓つてゐます。　私は同時にほかの巡禮者たちと一緒に自分の仕事をやり遂げたいのです。　蚤に血を吸はせてやる仕事を。――でも傷口を見るとどうも氣味が惡くなつていけない。　併しどんなに厭でも、夜晝ともに巡禮者の足を洗つてやるんです。　神に仕へるのは容易なことではないが、しかし私は神のお慈悲については大きな希望を持つてゐます。』

私はそれ以上彼と話をしたくもなかつた。　私は眠りかけるやうな風をしながら、横になつて考へた。

『つまり、この男は自分の神にそれほど大した犧牲を拂つてゐやしない。』

と、私の隣りの男が敷いてゐる枯草がかさ〳〵鳴るのが耳に這入つた。　彼は起き上つて、そろつと膝をついて祈りを始めた。

彼の祈りは最初には聞き取れなかつたが、やがて、かう言つて呟いてゐるのが聞えた。

『おゝ神聖なるシルリよ。　私が人の膿でもの吹でものを治してやるやうに、神が私の膿でもの吹でものを治して下さることを、罪人なる私のために主にお願して下さい。　おゝ、全

知なる神よ。　何卒私の苦痛と悶えを御寛下さい。　そして私をお許し下さい。　私の生命はあなたのお手の中にあります。　私は熱情の烈しい男でございました。　自分でもさう思ひます。　けれども、あなたが私にお課へになつた刑罰は、最早や充分のやうに存じます。　私を犬のやうに拒けて下さいますな。　あなたの下僕なる人々に、私を追ひ拂はせて下さいますな。　私の祈りを、香のやうにあなたのところへ上らせて下さいまし。』

これではこの男は神を外科醫とはきちがへゐるのであつた。　私はそれを聞いて厭でたまらなかつたので、指で耳をつぶしてゐた。

彼は祈りを濟ますと、道具袋の中から何かしら食べ物を取り出して、野猪のやうに騷々しい音をさせてしやぶり出した。

私はかういふ種類の人間に隨分出會つた。　彼等は夜は自分等の神の前に縮み上る癖に、晝間は、彼等の同胞の群の間を無慈悲に踏み通つて威張つて歩くのである。　彼等は神を下げ貶して自身の醜惡を隱す假面にして了つてゐる。　そして、

『おゝ神よ、私があなたへどれだけ支拂ひをしましたかを忘れて下さるな。』

こんなことを言つて神を値切つたり汚したりしようとかゝつてゐる。

自分自身の貪慾の盲目的な奴隷である彼等は、まづ自分たちより上へその貪慾を高め上げておいて、それから彼等の沈んだ怯けた心の、恐ろしい偶像の前に頭を下げて、かう言つて祈るのである。——

『おゝ神よ、あなたのお力のまゝに私を取り裁うとなさらないで下さい。怒つて私を罰して下さいますな。』

彼等は神の間諜、人間の裁判官として、地上をこそ〳〵歩き廻つてゐる。彼等は教會の規則のあらゆる違反を血眼で探して、怒つたり興奮したり、啜り泣きをしたり。

『人間の間に信仰が消えて了つてゐる。なさけないことだ。』

かう言つてつぶやいたりするのである。

私には或巡禮者の熱心が、殊に面白かつた。私は彼と一緒にペレイヤスラヴルからロストヴまで歩いた。その旅行の間中彼はかう言つて怒鳴りつゞけた。

『學徒シオドアの神聖な定則がどこにある？』

口髭の黑い、薔薇色の頰をした、肥つた壯健な男であつた。彼は金を持つてゐた。そして二人が夜泊る先々で、その金を女に使つた。彼は言つた。

『私は聖律の破滅と人間の墮落とを見て私の心の平和を失つた。それで私は自分のやつてゐた煉瓦の製造業を悴に引渡して、この四年間といふものを、行く先々であらゆる物を觀て漂白して來た。私の心は、本當の苦悶にさいなまれてゐる。二十日鼠どもが教會の寶庫に這入り込んでゐる。頑丈な聖律の組立ては彼等の齒牙にかゝつて碎かれて行くのだ。民衆は一般に教會に對する憎みに充ちてゐる。そして母のやうな教會の懷を棄てゝ、忌はしい邪教と分裂とに屈從してゐる。それだのに、神のために戰ふことを義務としてゐる教會は、さういふ事態に對して何をしてゐるだらう。教會は自分の富を增して自分の敵の軍隊を殖やしてゐる。教會といふものは、乞食のラザラスのやうに貧困に暮すのが當り前だ。それで以て、基督が言つたやうに、貧乏は本當に神聖な狀態だといふことを人々に知らせてやり、他人の富を欲しがつてぶつ〳〵言はないやうにさせるべき筈のものだ。それより他に教會の職務は何にもない。教會は人々をしかと防ぎ止めてゐなけれ

ばうそだ。それが全て出來やしない。』

それ等の宗法家は、聖律の尊守なぞは瑣末な事柄だといふことを明白に知つてゐた。そして彼等が聖律について考へてゐることを明け放しに言つた。かういふ調子で彼等は憶面もなく服從した。

私は聖山の上で、有名な巡禮者である或商人が、仲間の巡禮者たちに忍耐と謙抑と溫和とを說いてゐるのを聞いた。この商人はいつも、自身がいろんな靈場へ向けてさまよひ歩く間のことを、宗敎新聞に書いてゐる男であつた。

彼は感激して話した。涙が頰を流れ落ちた。彼は懇願したり脅したりした。人々は默つて、顏を俯向けて彼に耳を傾けた。

『では不正な極惡な所行をされても、お前さんは忍耐してそれを我慢したでせうか。』

私はかう言つて彼の言葉を遮つた。

『忍耐して、忍耐で以て、絕對的に忍耐してそれを、我慢しなくちやいけません。イエス、キリスト彼自身ですらわれ〳〵と、われ〳〵の救ひのために困苦を忍んで下すつた。』

『ぢやお前さんは、聖ジョン、クリソストムのやうな、言ひたい儘を言つて、國王に對してさへ不正を非難したやうな、あゝいふ殉敎者や敎會の敎父たちのことはどう說明します？』

彼はこの言葉を聞くと怒りに征服された。彼は激憤して、地びたを踏み附けて私に怒鳴りかゝつた。

『拙らない事を言ふな、この極端者。そんな人達は誰の不正を非難したのだい？ 異敎徒の暴君を咎めたんぢやないか。』

『ではユードキシア女皇は異敎徒だつたかい？ それから「恐しいイワン」はどうだい？』

私はかう言ひ返した。

『そんな人たちのことを話してるのぢやないよ。』

彼は丁度、火のついてゐる建て物を見てゐる人がするやうに、兩手を振り動かしながら叫んだ。

『われ〳〵は皇帝のことを議論してるんぢやない。民衆のことを言つてるんだ。民衆が

第一だ。彼等はあらゆる事を考へ込んで頭腦を鈍らせて了つた。それで最早恐ろしさといふことが解らない。彼等は野獣のやうなものだ。だから敎會は彼等に口桎を嚙ませなくてはならなくなる。それが敎會の任務だ。』

かういふ說敎者たちは非常に巧に口を聞きはしたけれど、その時分の私には、どういふ譯で彼等が民衆のことを苦にするのかその理由が解らなかつた。且つ私はたしかに彼等の言葉から或苦痛な印象を受け運んでは行つたものゝ、その言つた言葉がその時には私には解らなかつた。私が盲目だつたからである。そして民衆も目が見えなかつたからであつた。

十六

私がこの巡回通信者と議論をした後で、いろんな人たちが私のところへやつて來て話した。その話し方は、彼等が私から、何一つ、ためになる事を聞く期待を持つてゐないのを示してゐた。

『面白い男が一人ゐる。お前さんその男と何か話さないか。』

かういふ事から、森の中の湖水のところで晩禱をやる間に、彼等の取計らひで、私は巡禮者の中にゐた一人の若ものと對話した。彼は稻妻に打たれかと思はれるやうな、黑い顏色をした律僧であつた。髮を非常に短く刈つて、興味のない、苦い氣分をしてゐる男であつた。顏が全きり骨と皮で、そこから二つの蒼色の眼が猛烈に光つてゐた。彼は止み間なく咳をつゞけ、體中を振はせた。

彼は隱しきれない敵意を以てじろ〳〵私を見た。そしてぜい〳〵息をしながら、やつと話をした。

『お前さんは基督教の忍耐と謙抑を排斥してるといふ話だが、一體それはどういふ譯だ。』

私は何と答へたか思ひ出せない。たゞ、彼の疲れ果てた顏と、私に向つて叫び立てた切れ〴〵の聲だけ覺えてゐる。

『われ〳〵は現在の生活のためにこの世に生きてゐるのぢやない。未來の生活のために生きてゐるのだ。天がわれ〳〵の家だ。いゝか。』

テッケ・ターコマンズとの戰役で片脚を失つた一人の跛の兵が彼の側へやつて來て、怒つて言つた。

『みなさん、私は、恐怖が少ければ少い程信仰が增して來ると思ふ。』

そしてさつきの若い律僧の方へ向いて彼は言つた。

『お前が死を恐れるなら、それはお前だけの知つたことで、だれも他のものに係はつたことぢやない。それにお前は他の人にまで死を怖れさせたいのだ。われ〳〵はお前に手傳つて貰はなくも、われ〳〵を悲しませる事は足りるだけ持つてゐる。この赤毛野郎、喋るのは切り上げたがいゝ。』

若い律僧は急に姿を隱した。けれども人々は、私のいふことを聞かうとして居殘つた。そこには、五十人はしつかりゐたに相違なかつた。

私がどうして彼等の注目を煽つたのかは自分でも解らない。けれども、聽衆を得たのは愉快であつた。私は背の高い幾本かの松の木と、沈鬱な顏をした人々の間に夕方の蔭ばみが落ちるまで喋つた。

その時にはみんなの顏が私の方へ集つて來て、人を輕侮した、疑ひの表情を持つた一つの大きな顏になつた。口をこそ聞かないが、併し秘やかな思想には大膽な人の顏であつた。私はその百の目の中に、私の心に燃えてゐる火と同じやうな、消すことの出來ない火の輝きを見た。

この一つの顏は後には私の記憶から削られた。けれども、ずつと後になつて、私は、民衆の意志は、やはり、神律の擁護者を戰慄させ、彼等の民衆に對する恐れを誘動する、あの一つの思想に向つてゐるといふことが解つた。

この思想はまだ生れ出ないとしても、又はまだ明白に理解されないとしても、人心は、

その思想に敵對する聖律の堅固についての疑惑に授胎されてゐる。こゝに、神律を保護する人々の不安の根原が横たはつてゐる。彼等にはこの輕侮を持つた疑問の目附が見える。民衆が口を緘して默つて進んで行くのが見へる。且つ彼等は既に民衆の新思想の、目に見えない光線を感じてゐる。そして彼等はその緘默した瞑想の秘かな火が、彼等の聖律を灰に化しつゝあることを知してゐる。彼等には自分たちの聖律以外の他の律法が行はれ出すかも知れないといふことが解つてゐる。

彼等は、泥棒が、夜荒しに這入つた家の目さめた戸主の、そつとした足音を感附くと同じやうな、鋭い聰覺を持つてゐる。彼等は、民衆が一度び目を開いたならば、人生は天の方へ顔を向けて、上から下まで全で變つて了ふといふことを知つてゐる。人間が不和に生活し互に分離してゐる間は、人間には神はない。生きた神が、肉に充ちた人間と何の關係があらう。

充ち足りてゐるものは、たゞ、自分のぐるりの總ての人が饑ゑてゐるのに、自分の腹は一ぱいになつてゐるといふ事實に理由附けることのみを狙つてゐる。

かういふ人の生活は、その寂しさと、彼のぐるりを圍んでゐる恐怖の詛ひとに於て、一つに卷き込まれてゐる悲喜劇である。

私は漂浪してゐる間に、或時、一人の灰色の髪をした、背の低い、すつかりこさげ落した骨のやうに一寸も肉のない老人が、非常に奇態な仕方で私をじろ〳〵見てゐるのを認めた。

その老人の兩眼は、恐れに打たれでもしたやうに眼窩の中に深く沈んでゐた。彼は若い山羊のやうに元氣で、足も活潑ではあつたが、容子に何となく干乾燥びたところがあつた。彼はぐん〳〵人を推し退けて、群集の間を歩き廻つた。そして恰も知己を探してゞもゐるやうに、人々の顏を覗き込みながら、言はゞ、一人かけ離れて暮してゐた。彼は何かかんか私から得たいと思つてゐるやうな容子であつた。けれどもそれを口へ出しては得う頼まなかつた。彼の遠慮がちな點がしゝひに私の同情を呼び起した。

私はアサナシアス坐人を訪ふために、リウバンへ行く途中であつた。今言つた老人は、白い巡禮者の杖をついて、寂そりと私の後を歩いてゐた。

『小父さん、お前さんは幾年漂浪してゐますか？』

私はかう尋ねた。

彼は私の質問で喜んで、頭を後へ延して、輕くくす〳〵笑ひをした。

『九年ですよ、お前さん。九年間。』

『では重たい罪の荷物を背負つてる譯だな。』

私はかう答へた。

『お前さんはどこで罪の尺度や量衡を眼附けたい？　私の罪を知つてるものは神さまだけだよ。』

『でもお前さんは良心の上に何かしら載つけてゐるやうな氣がするもの。』

私は笑ひながら言つた。すると彼の顏には微笑が浮かんだ。

『どうしてだらう。』と彼は言ひ返した。

『私の良心の上には何んにもありやしないよ。世間の他の人と同じやうに暮して來たんだ。私はシベリアのトボルスクから遠くないところに生れたもので、若い時分には荷車

挽だつた。その次には宿屋と酒場とを一しよにやつてゐた。それから店も出してゐた。』

『誰かの物を盜んだんぢやないの？』

『どうして？　神は私には盜棒はさせないで下さつたんだ。何を言ふんだい。』

老人はかう叫んだ。

『なにたゝ冗談だ。私はお前さんを見ると、「あゝ、あそこに小さな爺さんが歩いてゐる。あの人は何も大きな罪を犯したやうには見えない。」かう獨りごとを言つてたところだよ。』

老人は立ち止まつて頭を振つた。

『私は人の心はみんな同じ大きさのものだと思ふ。惡魔は人の心を好いてゐる。だがお前さんは死といふものをどう考へてお出でだい？　それが聞きたいよ。私たちが夜泊るところでは、お前さんはいつも生活のことばかり言つてゐた。いつも生活のことを。――けども死のことはどうです。死はどこにあるのかね。』

老人はかう言つた。

『死はいつもどこかそこいらにゐるよ。』と私は言つた

彼はふざけるやうに、私に向けて指を振はせて言つた。

『さうだ。それだよ。いつもそこいらにゐる。　さうだ、いつもだ。』

『それでどうだと言ふんです？』

『おゝ、全くさうだ。』

かう言つて彼は爪立ちをして、私の耳に囁いた。

『死は全能だ。　基督自身だつて死を遁れることは出來なかつた。「この聖餐杯を持ち去れよ。」と基督は言つた。　それでも基督の天の父はそれを片附けさせなかつた。　さうして了ふことが出來なかつたのだ。「死は來らん。祝福されたる太陽は死す、」と言ふ諺がある。』

老人は山の小川の流れのやうに、しつきりなしに喋つた。

『死はすべての人に息をかけてゐる。　人間は言はゞ丁度竹馬に乘つて深い淵へ向けて歩いてゐるのだ。　死が翼で一掃き掃けばそれで人間は死んで了ふ。　おゝ神よ。　この世

界はあなたの力で組み上げられたのだ。　けれども、死に支配が任されたら、どうして世界が成り立つだらう？　人間はどんなに賢からうが腕があらうが、たゞ、死が「もう澤山だ。」といふまで生きてるだけの話だ。』

彼は笑つた。　そして彼の眼からは涙が湧き出た。

私はどう言つて説明をし得たゞらう？　私はそれまで死について考へたことはなかつた。そのときにもそんなことを考へる閑はなかつた。

彼は私の傍をちよこ〳〵飛ぶやうに通つて、萎びた目をして私を覗き込んだ。　彼の口鬚は振へた。　彼は左の手を胸の衣嚢に突つ込んでゐた。　そして死が叢から飛び出して來て、彼の腕を掴んで地獄に投げ落すのを待ち設けてゐでもするやうに、各の瞬間にぐるりを見廻した。

私は愕いて自分のまはりを見探つた。　周圍のすべてのものはみんな生命を以て脈打つてゐた。　地は泡立つ浪のやうに、綠柱石色の綠の着物を着つけてゐた。　空には肉眼で見えない雲雀が喜んで歌つてゐた。　すべてのものが、聲高い、喜び叫ぶ歡喜の騷ぎの下に、

太陽に向つて伸び育つてゐた。

『お前さんには、どうしてそんな考へが起つて來たんです？——ひどい病氣でもやつたことがあるのかね。』

私は、自分のこの偶然の知人に尋ねた。

『いゝや。私は四十七になるまで、仕合せな平和な暮しをして來たものだ。するとその年に女房は亡くなるし、義理の娘は首を縊つて死んで了つた。それがどちらとも同じ年の出來事だよ。』

私は言つた。

『その娘はお前さんが自殺をさせたんだらう』

『さうぢやない。あの子は放埒からそんなことをやつたんだよ。私はあの子に觸りはしなかつた。ほんとに私はどうもしたんぢやない。けれども、事實上私があの子と一緒に暮してゐたにしても、私は一人ものだつたんだから、そこは許して貰つていゝだらう。私は牧師だつた譯ぢやなし、あの女も私には見ず知らずの人間ではなかつた。私は女房

が生きてゐたときでも、それこそ綺麗に一人ものだつた。女房は四年といふ長い間病氣をした。そして一寸も暖爐のそばを離れたことがなかつた。あれが死んだときには私は「自由になりましたことを神に感謝いたします。」と言つて、十字の記號を切つたものだ。私はもう一度女房を取らうかといふ氣にもなりかけたが、併し不意と考へた「私は隨分さちんと暮してゐる。私はすべての人と平和にやつてゐる。けれども私はどうせ死なければならない。なぜ死ななければならないのだらう？」私はかういふ考へに惱まされて、何もかも息子に引き渡して出て來た。私は自分に向いて言つた。「お前はかうして旅をして廻つてゐれば、巡禮者になつてお前の墓へ向けて歩いてゐるといふことには氣が附かないだらう。ぐるりのすべてのものが非常に愉快な容子をしてゐるからだ。あらゆるものがお前に點頭き微笑んで、お前を、言はゞ墓場から引き退けてくれてるから。」私はかう言つた。けれども、どつちにしたつて全く同じことだ。やつぱり成る通りになるんだよ。』

『お前さんは、心の中で本當に悲しんでゐますかい？』

私はかう言つた。

『あゝ、お前さん、私はそれこそ慘めなものだ。言ふに言へないくらゐ慘めです。晝の間は私は人々と一緒にゐるやうにして、みんなの後ろに自分を隱してゐる。それが出來なければ伴れの人を見附け出すやうにしてゐます。けれども、夜になつて、何も保護してくれるものが亡くなると、だれ一人かばつてくれるものもないなりに寢床に入るのはほんとに恐ろしい。それは丁度、こちらがそこにゐるかゐないかを見るために手探つてゐる黑い手を、胸の上に感じでもするやうだ。猫が二十日鼠を弄るやうに、そいつが心を弄るのだ。だから心は振へて恐れで一ぱいになる。ほんとに、それこそは？起きてぐるりを見廻すと、ぐるりには人が寢てゐる。けれども彼等が起きてくれるかどうかは分つたものぢやない。時には死は大勢の人を引つ浚つて行く事がある。私の村では一軒の家の家族をすつかり奪つて行つた。亭主とかみさんと二人の娘が、みんなで風呂場の中で炭の毒氣のために窒息したんだ。』

彼の唇は慄へた。彼は微笑むやうに見えた。けれども目からは小さい涙が流れ出

た。

『誰でも、一時間足らずの内に不意に死んでしまへたり、眠つてる間に死ぬることが出來るといゝのだが、まづ病氣が襲つて來て、だん〳〵と體を衰へさせるのだからな。』

彼の顏は皺ばり髮は逆立つて、黴附いたやうな顏附になつた。彼は歩巾を小さくして、ひよこ〳〵と飛びうろついた。目には光澤がすつかり亡くなつた。そして、半分私の方へ向き、半分は自分自身に言ふやうに、そつと低く呟いた。

『おゝ主よ、私はたゞ小さい蚊になつてもいゝからこの世に生き永らへたい。おゝ主よ、私を殺して下さいますな。床蟲や蜘蛛のやうにでも生きさせて下さいまし。』

『本當になさけない男だ』と私は心に思つた。

彼は、足を止めるところへ來て伴れが出來ると、すつかり快活になつて、すぐにこの世界の支配者なる死のことを話しはじめるのであつた。

『あなた方は死ぬんだ。』

かういふのが彼の説教の主題であつた。

『あなた方はその内何日か、何時か、あなた方の知らないときに死ぬのだよ。こゝから二哩ばかり先きへ行つて電光に打たれるかも知れない。』

中には彼の言葉を聞いて悲しい心になるものもゐたが、又、怒つて叱りつけるものもゐた。一人の年若い女は叫んだ。

『お前さんの火藥は發火しやしないよ。そんなたはけた、無意味なことをお言ひでないよ。』

この女がいかにも憎らしさうにかう言つたので、老人は死の讃美を急に止めて、默り込んで了つた。

彼はリューバンへ行く間中、私に慰めを與へようと試みた。しまひには私は、彼と彼の永久の問題とにうんざりした。

私はこの老人と同じやうに、死とばか〳〵しい隱れん坊をやつて遊んで、死をまいて遁げようと思つてゐる人間にいくたりも出會つた。若いものゝ中にでも、老人よりも見苦しい卑怯な奴がゐる。無論彼等は神を信じない連中である。こんな人間達の心は、暖爐

の導管のやうに黑い。風が一つもない時にも、恐怖がいつも彼等の中にひゆう〳〵唸つてゐる。彼等の考へは、巡禮をして歩く婆さんのやうだ。彼等は自分がどこへ向けて行つてるのかを知らないなりに、地面の上を踏み歩いてゐる。そして彼等の行く手を塞ぐあらゆる生き物を盲目滅法に踏みつける。たえず神の名を口に上してゐるけれど、心では少しも神を愛してゐやしない。自分たちの意志を實行する事も得うしない。たゞ自分たちの「死の恐怖」を人類に傳へ知らせようとする努力が、たつた一つ彼等の心を占領してゐるばかりである。それで以て、かういふ乞食どもがちやんと食べものと泊りどころとを得ようといふのである。だからして、もし彼等に甘い物をくれるならば、彼等は自分自身の腐敗の毒をほかのものたちの心に注ぎ込むのだ。彼等は恥を知らない乞食である。全く利己主義な奴等である。彼等は宗教行列が通るときに、道ばたに坐つて、人の憫みを唆かして銅貨をふんだくるために、傷や醜い手足を公衆に曝す、跛の片輪者と同類である。

彼等は精神的不安の兇惡な種を蒔き散らしながら世間を歩き廻つてゐる。彼等は唸り

聲を出して、ほかのものたちが自分等に答へて唸るのを聞かうと欲つてゐる。彼等の周圍には、謙抑な、神を求め探してゐる人々の集りが巨大な浪になつて上下してゐる。人間の苦勞と悲しみとがごたまぜの色をした百色眼鏡を形造つてゐる。

私は一例として、さつきの老人を、火藥が發火しないと言つて輕蔑した、あの小露西亞生れの女を擧げる。彼女は齒を喰ひしばつて默つて歩き廻つた。彼女の日に燒けた顏は激しい怒りに燃えてゐた。眼からは怒りの焰が電光のやうに閃いた。人が物を聞くと全て短劍で以て突き刺しでもするやうに鋭く答へた。

『お前さん、そんなに怒鳴りつけないでくれよ。』と私は言つた。

『それよりも、お前さんの靴のどこんとこがぎし〳〵するか、それを私に言つた方が餘つ程ましだ。さうしたらもつと氣樂になれるだらうよ。』

『私にどうしろとお言ひなの？』

『何にもしてくれつて言やしない、心配なさんな。』

『私は何にも怖かない。だけども何もかも一々厭だ。』

『私にどんな厭なところがあるの？』

『なんでお前さんは色んなことを言つて私を困らせるんだらう。私は怒鳴つて人に助けに來て貰ひますぜ。』

彼女は老人でも若いものでも、すべての人を嫌つた。女たちをさへ厭がつた。

『私はお前さんの苦悶が聞きたいのだよ。それより外に何んにもお前さんに求めやしない。私は人類を苦しめるものを何でも一々知りたいのだ。』

かういふと女は私を尻目にかけて、

『惡魔につかまれるが好い。そんなことは他の人に行つてお聞きなさい。みんなが同じやうに呪はれてゐるんだから。』

『ではどうして私を呪ふんです？』

『だつて呪ひたいからさ。』

私にはこの女がつきものでもした女のやうな氣がした。

『そんならお前さんは殿堂で誰のために祈る積りだい？』

私はかう言つた。

彼女は顔中に齒をむき出して怒つて、足をゆるめた。そして私にでなく自分自身に言ひかけでもするやうに話し出した。

『去年の春、私の亭主は材木を流しにドニイバア河へ行つたなり、たうと歸つて來やしない。溺れたのかも知れしない。ひよつとしたら他の女房を目つけ出してるかのも解らん。知れたもんぢやない。私の舅と姑とはひどい貧乏をしてゐる。あの人たちも惡い人間だよ。私には子供が二人ゐる。男の子と女の子と二人。——どうしたつてあの子たちを私が食はせたり着物を着せたり出來つこはなかつた。私は働く氣でゐた。ほんとさ、しまひに指が骨になるまで働かうと思つた。けれども働く仕事がなかつた。それにどうせ女が自分一人の仕事で何が取れるだらう。私の舅はこんなことを言つて私を侮辱した。

「お前とお前のがきたちは私たち二人の頸にぶらさがつた石だ。お前は私達を食ひ潰し飲みつぶしてしまつた。」すると姑が言ふには「お前は若い女だ。方々の修道院へ行けよ。律僧たちはみんな色好きだ。だからお前金がうんと儲かるよ。」かう言ふのさ。

……私は子供たちが饑ゑるのをぢつと見てゐることは出來なかつた。……で、まあ、さういふ譯でお袋の言ひ勸め通りになつて出て行つたんさ。……その方が子供を溺れ死なすよりもましだつた。』

女は齒の間から聞き取れない言葉をしつ〳〵と出しながら夢を見てゐる人のやうに話した。その目は母らしい悲しみを以て悶えてゐた。

『私の小さい男の子は今年四つになる。オシップといふ名前だ。娘の方はハンカといふんだ。私はあの子たちが麵麭をねだつて困らせるといつも撲ちなぐつてやつた。あの子たちを撲ちなぐる　えゝ、なぐりつけた。私は今日で一月こんな風なことをしてゐる。そして四留儲けた。律僧たちは客つたれだよ。まともな事をしたつてもつとは儲かつたらう。おゝこの惡魔ども、惡魔ども。私のこの恥を洗ひ落す水はどこにあるんだ？』

私は慰めてやるつもりで何か言はなければならなかつた。だから私は答へた。

『神はお前さんの子供たちのためにお前さんを許して下さるよ。』

すると女はそれこそ烈しく怒鳴りつけた。

『そんなことは構やしないよ。私は神のことにかけてはどこまでも清淨なんだ。神が私を許して下さるなら結構な仕合せだ。けれども許して貰つたつて私は忘れることは出來ない。さうさ、どうして忘れられるものか。地獄へ行つたつても滅多にこれよりひどいことはない。とにかく地獄では子供を伴れてる世話だけはないだらうよ。』

『あゝ飛んだことをした。どうして私はこの女をこんな極點まで興奮させたのだつたらう。』

私は心でかう思つた。

女は言葉の溢れ出るのを遮ることが出來なかつた。

『貧乏人を守つてくれる神はゐない。ゐやしない。私たちはアムーア河の地方の、ゼレニクリンへ行つたときには、いくども祈禱を唱へて貰つた。そしてみんなで祈つて、泣いて救ひを願つた。だけど神は私たちを助けに來たらうか？　三年といふ長い間、私たちはあの土地をさまよひ歩いた。そして私たちの中で、熱病にかゝつて死なゝかつたものは乞食になつて歸つて來た。私の父はあそこで死んだ。母は荷馬車の車輪で片脚を挫かれた。そして私の兄弟は二人とも、シベリアで行衛が分らなくなつて了つた。』

彼女の顏は全で化石したやうに見えた。その顏は或眞面目な美しさを持つてはゐたけれど野鄙であつた。目は黑く、髪はふつさりして勢があつた。二人は番人の小屋の後の森の緣に坐つて、早朝まで夜通し話した。私はこの哀れな女の心が燒き盡されて燃殼になつてゐるのを認めた。彼女はたゞ自分の子供の時分のことを話すときにだけ泣き得た。彼女は自分で堪へられなくて二度微笑んだ。そのときには彼女の目はもつと柔かい光を持つて輝いた。

彼の女が話してる間に私は心に考へた。

『この女はいつでも人殺がやれる。さつと自分が死ぬ前に誰れをか殺すだらう。人殺しをやらなければ最下等の淫賣婦になるだらう。この女にはそれより外にはなりやうがない。』

『私には神さまが見えない。私は自分の隣人を愛しない。お互同志助け合ふことすら出來ないものといへばどういふ種類の人間だらう？　そんな物が人間と言へるだらうか。そ

いつらは強いものに突き合はせたら小羊だけれど、弱いものと取り合へふときにや狼だ。併し狼だつて群になつて生きてゐる。けれども人間はめい〳〵自分だけのことばかり考へて、お互に敵同志になつて生きてゐる。本當に私は色んなことを見て來た。隨分難儀もして來た。人間がみんな亡びてしまへばいゝ。人間は子供を產み出すばかりでそれを育てるすべを知らない。それでいゝだらうか？　私は子供等が麵麭を欲しがると撲ちなぐつた。いゝかい、なぐり附けたんだよ。』

女は夜が明けると、律儀等を相手に例の商杯をするために私を置いて立つて行つた。

併し行く前にかう言つて私を嘲つた。

『お前さんは一たいどうしたんだい？　二人で一緒に夜明しをしたぢやないか。……お前さんは私よりか力が强いのに、なぜこんな機をつらまへて儲けなかつたの？　一文だつてお金がかゝる譯ぢやないのに。ぷう、馬鹿な人。』

全で私の顏を平手でなぐり飛ばしでもしたやうであつた。

『お前はそんな事を言つて私を侮辱する權利はない。』

私はかう言ひ返した。

女は顏をしかめて言ひ續けた。

『私はだれでもかれでも片つ端から侮辱してやらなけりや納まらないんだよ。私に對して何の惡いこともしないでもさ。お前さんは全で萎れ切つてはゐるが、まだ若い。お前さんの髮は顳顬のところが白髮になつてるよ。お前さんは自身の悲しみの重荷を背負つて歩いてゐるんだ。私にはちやんと解る。でもそれが私にどうだつて言ふんぢやない。私はだれをだつて可哀想だとは思はない。あばよ。』

かう言つて女は立ち去つた。

十七

私は六年も歩き廻つてゐる間には、悲しみと苦痛とのために不幸な目を見てゐる人間に澤山會つた。彼等の目の中には消すことの出來ない憎しみが輝いてゐる。彼等はどこへ行つてもたゞ凶惡ばかりを見るのである。凶惡を見て、言はゞ暖かい風呂にでも這入つたやうにその中で湯浴みをしてゐる。彼等は酒飲みが杜杉子酒を飲むやうに缺點を飲んで得意になつて、あざ笑つてゐるのである。

『われ〳〵は正しい人間だ。どこへ行つても凶惡がすべてのもの、君主だ。凶惡と不幸とが君主だ。』

彼等は激烈な失望に陷り、それを怒つて色んな亂暴をやる。恰も大地が彼等を生んだのに對して復讐しようとでもするやうに、あらゆる仕方でこの地上を汚してゐる。そして自分自身の弱點の奴隷となつて、死が追ひついて來るまで、地上のすべての街道の上をのそり〳〵歩いて行くのである。

彼等は神が玉座についてゐる高いところまで自分たちの困難を押し上げて、神の前に平伏する。そして自分自身の化膿したでものより外には何ものをも見ようとはしない。彼等自身の絶望の哀泣の外には何んにも聞かうとはしない。

彼等は殆んど狂氣のやうに見えるので、誰でも彼等を可哀想だと思ひはする。けれども、彼等は皆んなの人の顏へ憎惡を吐きかけるし、出來得るなら太陽をでもそれで以て汚さうといふ了見だから、皆んなは彼等を見ると更に嘔氣を催して來る。

また中には、悲しみに刺通され、恐壓されて、呻き聲も出さずに、小さい、みじめな生存を葬らうとも、がいても、それが出來ないために、世の中の强者が彼等の古い塞の壁の穴をつぶすのに使ふ粘土のやうに、彼等の奴隷になるものもある。

「多くの人間と、多くの言葉とが私の記憶の上に捺しつけられてゐる。いろんな澤山な涙が私の前で流された。絶望の笑ひが私の耳に鳴り響いて、私を聾にしたことも一再ではない。私はあらゆる害毒を嘗めた。多くの河々の水を飲んだ、そしていく度も、自分の弱いのを泣いて苦い涙を流した。

人生は恐ろしいうなされのやうに、混亂した想像の畫のやうに、捲き上るやうな言葉の騒亂、養え立つ涙の雨、絶望の不朽の叫喚のやうに、そして、烈しい不安と、私には理解の出來ない苦痛との中に勞働してゐる全世界の、苦しい拘攣のやうに、私の前に現はれた。

すると聲高い呻きが私の心から突き出て來た。

『いや〳〵さうぢやない。そんな譯があるものか。』

悲愁の奔流は地上のすべての街道と側道との上を、陰暗な流れになつて漲つた。私はすべてのものがせめぎ合ふこの混亂した鬪爭の中には、神を入れるために殘された場所が一つもないといふことや、神の力がどこにも表現され得ないことや、神の足が落ちつきどころを見出し得ないのを見て、不意な恐怖に襲はれた。人生は、悲哀と恐怖、惡意と絶望、貪慾と破廉恥の蛆蟲に食ひ盡されて、微塵に粉碎してゐる。人類を結び合はせるすべての〻つなぎは解けて了つた。各〻の人が孤立して、何の頼りもなしに、自分々々の離ればなれな道を彷徨つてゐるのである。

私はそのとき自分自身に聞いた。

『神よ、あなたは實際人間の心の夢に過ぎないのですか？　あなたは救ふに救へない暗黑な時間に絶望から生れた一つの希望といふまでのものでせうか？』

私は各〻の人がみんな特別の神を持つてゐるのを見た。そしてそれ等の神はいづれも、その熱心な信者と同じ高さの平面にしかゐないのを見た。私はこの事實を見ると悲しくなつた。人間は神を求めないで自分の個々の悲しみを忘れることのみを求めてゐる。悲しみは八方から人間を苛めてゐる。人間はいつも、言はゞ自分自身の前から遁げてゐる。なにをするのも避けようとし、この世の生活にたづさはる事を怖れて、たゞ自己を隱すための靜かな片隅ばかり探してゐる。

私は人を押し動かしてゐるのは、神を求めるものゝ神聖な不安ではなくて、單に生活に突きつけられる怖ろしさではないかと思ふ。神に得る歡びを追求してもがいてゐるのではなくて、たゞ自己のみじめさを遁れやうとあせる、役にも立たぬ心配に過ぎないのではないかと思ふ。

すると私の心は再び叫んだ。

『いや〳〵、そんなことはない。それは嘘だ。』

私は時々、眞面目な默想に沒了してゐる人を見た。彼の兩眼からは純潔な美しい焰が輝いた。私は一二度さういふ狀態にゐる男に出會つた。けれども三度目四度目に見たときには、彼はきつと非常に怒つてゐるか、それでなくば醉ひどれてゐた。その男の愼み深いところや控へ目なところが全つきりなくつてゐた。下卑た傲慢な人間になつて、神を瀆し罵つてゐた。

何がこの男の落ちつきを搔き亂し、その人物の全てを變化したのか私は知らなかつた。總ての人は盲目のやうなもので、歩くときに少し躓づくのである。彼等から生々した、靈感を與へられるやうな言葉を聞き得ることは滅多にない。惡い習慣から、彼等は所中、全て外國語を繰り返してゐる。その言葉の下に横はつてゐる思想の價値をも無價値をも知らないなりに繰り返してゐる。

人々は信仰深い律僧の說敎や、隱者や行者の豫言を集めて、それをば、丁度子供等が壞れた器物の缺けらを配り分けるやうに、お互の間に分けてゐるのである。最後に、私は

人間らしい人間には一人も出會はなかつた。彼等はたゞ荒廢した生活の廢墟であつた。地上を漂うて、あらゆる風のために寺院の階段へ向けて吹きまくられる、汚い、人間の塵であつた。

だれだつて得う數へない程の群集が、聖徒の遺物や奇蹟的な繪のぐるりに集つたり、神聖な泉に沐浴したりして、到るところに自己忘却を求めてゐる。

宗敎行列は私には苦痛な光景であつた。子供の時分ですら、不思議な靈驗のある繪は威力を失墜した。律院の生活はさういふ繪の奇蹟的な力に對する私の信仰を全きり破壞した。私は、大きな灰色な蛆蟲のやうな人間たちの集團が、何とも知れない或力に强ひられて、街道の塵埃の中をのそ〳〵歩いて行くのを見た。そして彼等が興奮して、『ずん〳〵行け。もつと早く歩け。』と互に叫び合ふのを聞いた。

彼等が頭をどうしても地面まで下げなければならないやうな或神聖な畫像が、黃色い鳥のやうに彼等の頭上をまひ〳〵してゐた。彼等の荷が一々皆んなのものに餘りに重過ぎでもするやうに見えた。

群集の足の下の、泥や塵埃の中に、氣でもちがつたのかと思はれるやうな男や女が、生きた鞠のやうに倒れて、砂に打ち上げられた魚のやうに、どたばた轉り廻つてもがいてゐた。すると騷がしい叫び聲が起つた。その他のものたちが、聖母の像に向つて、

『お喜びなさい、おゝ天の女王よ。』と叫びかけながら、倒れてゐる男女たちの動悸を打つてゐる體の上を、踏み越え踏みつけ蹴り退けた。

顏といふ顏はみんな汗でびた〳〵になり、塵埃で黑くなつて、ねぢくれ、疲れ、物狂はしい見えになつてゐた。かうした人間の行列の全部、その疲れはてた聲の、面白くもない歌、そのけたるい足どりは、大地への侮辱であつた。天の顏を暗くした。

往來の兩側の木の下には、すつかりの乞食が、二筋の雜色なリボンのやうになつてずらりと列び擴がつてゐた。そこには、病人や、片輪や、跛、盲目、瘡だらけの奴等が坐つたり轉つたりしてゐるのである。彼等の困憊した體は地びたの上に悶えのたくつた。その片輪の手足はがた〳〵震へながら空氣に曝されて、人の憫れをそゝるやうに擴げ出されてゐる。そこには乞食どもの群が、傷口を日に焦げさせて坐つて、わい〳〵どなり驗り

ながら、神の名に於て小錢をせがみ引つたくつてゐる。目のつぶれてゐる顏が澤山ゐた。さうかと思ふと、二つの目が燃えてゐる石炭のやうに熱し光つてゐるのもあつた。痛みは絕え間なく彼等の肉と骨を嚙んだ。多くのものは、或汚らはしい恐ろしい發疹の跡を殘してゐた。

私はこんな人間たちが狂氣のやうに追ひ求めて急いで行くのを見た。そのときには、塵埃と泥を通して、彼等をぐん〳〵推しつけて行く力が、私には凶惡な、極惡なものゝやうに思はれた。どうしてだらう？

『いや〳〵、それは眞實ではない。眞實である譯がない。』

私は愕くべきキエフの町へ行つたときには、あの昔の露西亞の、「高地の町」の大きさと美しさとに驚いた。

この町で私はふとした機會から、物の解る男だと評判されてゐる或一人の律僧と眞面目な會話をした。いろんな話をした中に、私は彼にかう言つた。

『私はわれ〳〵人間の生活の基本となつてゐる法則が解らない。』

『お前さんは誰だ？』

『百姓です。』

『讀み書きが出來るかい？』

『ほんの少しばかり。』

『物が讀めて物が書ければ充分ぢやないか？』

彼は手酷しくかう言つた。

私は彼の言ふことから、彼が非常に聰い人間だといふことを推定した。

『お前さんはスタンディズムの敎徒かい？』

彼はかう言つた。

『さうぢやありません。』

『ほう！　ぢやダクボア敎徒だな？』

『どうして？』

『お前さんの言つてることから考へて、ダクボア敎徒ぢやないかと思つた。』

彼の顏は櫻の實のやうに赤く、目が非常に小さかつた。

『お前さんが神を求めてゐるとしたら、お前さんの目的は、きつと、たゞ神を塵の中で踏みつけようといふのだらう。』

彼は私に向けて指を振はせて言つた。

『私にはお前さんが解る。けれども、お前さんが信仰箇條を百遍一人で誦へるとして、御覽。——まあやつて御覽よ。さうすればお前さんのやうな愚にも附かない考へは煙のやうに消えてしまふよ。お前さん見たいな異端者はアビシニヤ人かエシオピア人かのところへ送らなくちや嘘だ。そこへ行けばぢきに燒き焦がされるよ。』

私は彼に言つた。

『ではあなたはあちらへ行つたことがあるんですか、アビシニヤへ。』

『あるとも。』と彼は答へた。

彼は怒つて眞赤な顏をした。

私は、ドニーバーの河畔で、一人の男が神聖なラヴラ寺院の向うの河岸に坐つて、河の

中へ石を投げてゐるのに出會つた。彼は五十恰好の年輩で、長い口鬚を生やし、全て禿た大きな頭をした、丸顔の男であつた。

そのとき私は、たゞちらと一と目見たゞけで、彼の目の表情から、思索家だといふことを認め得た。私は近づいて彼の傍に坐つた。

それは夕方時分であつた。ドニーバーは濁つた、激しい流れを打ちよせてゐた。河の後にはいろんな色どりをした寺院のそちこちに立つた丘が聳えてゐた。寺院の圓屋根のはでやかな鍍金が日に輝いた。十字架といふ十字架はぴか〳〵光つた。そして寺院の窓は寶石のやうにきらめいた。それは丁度、地球が彼女の胸を裸はして、誘りがな、寛大な態度で、自分の寶を太陽に見せてゐでもするやうであつた。

私の傍の男は、低い悲痛な調子で言つた。

『ラヴラ寺院をすつかり閉鎖し、律僧どもを追ひ出して、だれをも這入らさないやうにしなければ間違ひだ。あれだけの美しさの中へ這入る價値のある人間は今時だれもゐやしない。』

その律院は河の對岸に、だれか大きな賢い人が物語つた妖精物語のやうに立つてゐた。ドニーバーの波は、その律院の前を遠くから急ぎ通つた。そして律院を見て歎んでとはしりを立てた。併し、河の愕くべき騒ぎも人間の弱い聲を溺らせることは出來なかつた。

『何といふ大きな設計をした寺院だらう。そしていかにも力強くやりとげたものだ。』

さういはれて私は、長い前に夢の中に見た顔のやうに、ヴラディミア大公や、教會の巨擘なるアンソニーやセオドシアスや、あらゆる露西亞の英雄たちのことを考へた。そして深い憫みが窃に私を襲うて來た。

對岸では、澤山の鐘々が聲高く嬉しさうに鳴り渡つた。けれども私の心の中では、人生についての悲劇的な思想がそれよりもまだ聲高く鳴り響いた。

世間の人々はだれも人間の起原を考へやしない。私はといへば、それこそ眞の信仰を求めたのであつた。私は今、人間が本當にどこに存在してゐるかを自分自身に聞いてゐる。私の目には人間といふものが一人も見えない。コサックや百姓や官吏や僧侶や商人がゐるのは私にも見える。けれども、無作法に言つて丁へば、この俗世間のいろんな事

柄と無關係な人間を一人も見出すことが出來ない。どれもこれもみんな、他のだれかの奴隷である。他人の命令を受けてゐる。人々の頭の上にはまた他の頭がある。こんな譯で一つの頭が他の頭の上に聳えて、しまひにはあらゆるものが視界から消え盡し、行きつくことの出來ない一つの高みに這入つて了ふ。神が隱されてゐるのはその高みである。夜は隨分ふけた。河の水は青い色を帶びた。寺院の上の十字架はいづれも輝きを失つた。

さつきの河岸の男は尙いつまでも水の中に小石を投げつゞけた。併し私には、最早その小石が造る渦は見えなかつた。

その男が言つた。

『三年前に、マイコバといふ私の町で家畜の間に疫病が突發したゝめに暴動が起つた。龍騎兵がわれ〳〵を押へに繰り出された。そして家畜のことで基督敎徒が基督敎徒に殺された。澤山の人が死んだ。そのとき私は一人で考へた。神は「汝等殺すことなかれ。」と言つてゐるのにわれ〳〵は幾頭かの牛のことで互に殺し合ふのだ。それではわれ〳〵

露西亞人は眞にどういふ信仰を持つてゐるのだらう。私はかう考へた。』

ラヴラはだん〳〵と暗がりの中に消えて了つた。丁度、幻のやうに、山の中へ消え込みでもしたやうであつた。

河の傍にゐたそのコサック人は砂の中を兩手で搔き廻して小石を探つてゐた。そして小石が見附かるとそれを河の中へ投げ込んだ。それが水を打ち附ける音が聞える。

コサックは頭をうな垂れて言つた。

『さういふ體たらくだ。神の法令は精神上の乳だけれど、われ〳〵はたゞその滓だけしか貰へないのだ。「心潔きものは神を見ることを得ん。」と書いてある。けれども、人が自分の思ひどほりに生きて行かないでは、どうしたつて心が潔くなりつこはないだらう？人に自由意志がないとしたら、その人の信仰は本當の信仰ぢやない、無駄な拵へものだ。』

彼は立ち上つて體を搖つた。そしてぐるりを見廻した。彼は丈夫な體格をした男であつた。

『われ〳〵は思ふ存分に神に仕へることが出來ないのだ。——私のいふのはさういふ意味

だよ。』

彼は帽子を空中に振つて立ち去つた。併し私は、地びたに根を下しでもしたやうに、そのまゝそこにぢつとしてゐた。

私はコサックの言つた言葉を理解しようと試みた。けれど私には解らなかつた。それでも彼の言葉には意味があるやうな氣がした。

暗い南方の夜は、その愛撫の中に私を包んだ。私は坐つて考へた。

『人間の靈の美しさはたゞ沈思のみにあるのだらうか。人間の衝動の渦が轉廻する軸線はどこにあるのだらう。かうした騷擾と混亂のより深い意義はどこにあるのだらう。』

私は常に、眞に暖かい南部地方で冬を過さうとした。もし雪や寒さのために北方を出ることが出來ないと、いつも律院へ這入つた。律僧等は、はじめは私を侮つた。けれども、私が一生懸命に働き得ることを示すと、彼等はより親切になつた。彼等は勤勉に働いてしかも賃金をねだらない人間を好くのである。私の足は、手と腦とが働いてゐる間休んだ。

私が前の夏に見たすべてのことが再び私の腦を潜つた。私は自分の精神に純潔な營養を與へたものをすつかり私の經驗から拔き出さうと努力した。私は檢査をし、解剖をやつて、物事の目的を理解しようとした。そしてそれを解し惱んで殆ど泣き出した事が幾度もあつた。私は人間の哀泣や唸き聲には飽きたやうな氣持がした。私は精神の大膽さが消散して、陰鬱な默り込んだ人間になつた。そしてあらゆる人々とあらゆる事柄とを罵つた。

時々私は深い沈鬱に打ち負かされた。そして何週間といふ間、ずつと、私は何物にも目をくれず、何にも心を向けないで、ぼんやりした人間か、盲目かのやうに歩き廻つた。私はいく度となく、こんな浮浪生活を棄てゝ、ほかの人間と同じやうに暮して行くことを考へた。こんな謎で自分を苦しめるのをよして、徐かに物事の定つた秩序に從ふことを考へた。

私には晝は夜のやうに暗かつた。月が空で淋しいやうに私は地上で淋しかつた。たゞ私は光りを放たないだけの違ひであつた。

私は時には、言はゞ、自分自身から遁げたこともあつた。そして心の中で言つた。

『十字街に逞しい若者が一人立つてゐる。詮じつめて見れば何人をも知らない若者だ。何一つ彼を喜ばせるものもない。彼は何人をも信じない。彼は何のために生きてゐるのだらう。何故に彼はこんなに世間から切り放されてぶらついてゐるのだらう。』

かう思ふと私の心は寒さに麻れた。

十八

私はまた、よく尼院に一二週間泊つた。ヴォルガ河に臨んだ或尼院で、私は木を小さく切つてゐるうちに脚に傷我をした。親切な、年寄りの敎母セオクティスタが私を看護してくれた。

その尼院は小さいけれど併し裕福な集團であつた。尼たちはみんな品威を持たせて貰つて居り甘いものを食べてゐた。私は彼等の誘惑的なそぶりや、作り笑ひをする微笑みや、彼等の實りのいゝ收穫を見るとむか〳〵した。

或夕方、晩禱式の手助けをしてゐるとき、私は、或る唱歌者の尼が、神聖に歌つてゐるのを聞いた。彼女はにこやかな顏をして黑い目にうつとりしたやうな表情のある娘であつた。大きな赤い唇をしてゐた。そして聲が澄んでゐて、音區が大きかつた。この女は何物をか乞ひ求めてゞもゐるやうに歌つた。怒つて涙を流してゐやしないかと思はれるやうな聲であつた。

私は脚が殆んど癒つて、再び仕事が出來るやうになつたので、また漂浪をはじめようとしてゐた。

或日、尼院の庭園の、小徑の雪を掻きのけてゐると、今言つた尼が私に行き合つた。そして全で麻痺てゐでもするやうに、そつと私の側を通つた。胸に押しあてた右の手に念珠を持つてゐた。左の手は軟かに横脇に垂れてゐた。彼女は唇を嚙んで、蒼い顏色をして、眉毛をしかめてゐた。

私は丁寧に挨拶をした。けれども彼女は頭を上げて、私が、いつかこの女の大きな苦痛を引き起したことがありでもするやうに一目私を見た。

私は彼の女のかうした仕打が不愉快であつた。殊に私は、こんな年の若い尼たちのだれにも害をした筈はなかつたからである。

『あゝ姉妹よ、こゝでは生活が氣樂でないらしいね。』

私は彼女にかう言つた。

彼女は立ち止つて怒つたやうに言つた。

『何ですつて?』

『どうも自分に打ち勝つといふことは難かしいものらしいと言つたんですよ。』

すると彼女は、だしぬけに、低い、併し怒つた聲で言つた。

『おゝ、この惡魔の化身。』

彼女は走つて逃げて了つた。その黑い姿が暴風に追ひまくられる雲のやうであつた。

どういふわけでそんなことをこの女に言つたものかそれは私にも判らない。けれども、その時分には、そんな考へが屢〳〵私の頭に起つた。そしてそれが一番先きに傍を通つたものゝ目の中へ火花のやうに飛んだ。私にはみんなが、嘘つきのごまかし者のやうに思はれた。

その後暫く立つてから、私は、ほかのところで再度この女に行き合つた。そのときには私は前のときよりも尙むかついた。

『どうしてこの女はあんな黑い着物で體を隱してゐるんだらう?』と、私は思つた。

『お前さんはこゝを逃げ出したいのかい?』

私はその女が私のそばを通りすぎるときにかう言つた。

すると彼女はぴつくりして、頭を後にそらして、鎗のやうに眞直に立ちすくんだ。私は彼女が大聲を出すかと思つた。ところが、彼女の通りすがひに、私は思ひも寄らない返事を聞いた。

『今晩言ひます。』

私ははじめは私の耳にだまされたのだと思つて殆んど度を失つた。併し、その言葉は、低い聲で言つたのだけれど、私の耳には鐘の音のやうにはつきりと響いた。

私はそれを可笑しいとは思つても、それでも女の言つたことに刺戟された。けれども、私は、あの女が、私を圖太く調弄つたんだと思つて氣を鎭めた。

私は脚に傷我をしてゐたので、寺院では私を療病所へ入れてくれた。それは梯子段の下の小さい室であつた。私はずつとそこに這入つてゐた。

その晩私は寢床に横はつて、自分の漂浪的生活をよして、どこか町へ行つて、麵麭の製造場で働き口を探さうかと考へてゐた。私は晝會つた女のことは、それぎり考へたくも

なかつた。

すると不意に私の室の戸をそつと叩く音がした。私は跳び起きて戸を開けた。と、一人の年取つた女が私に辭儀をして、

『どうか一緒に來て下さい。』

かういふのであつた。

私はこの婆さんが自分をどこへ伴れて行くのかさつぱり別らなかつた。また聞いても見なかつた。けれども婆さんの後へついて行きながら心に考へた。

『冗戯だらう？　ちよいと、こいつ奴。待つてろよ、うんと愕かしてやるから。』

二人はいろんな廊下や連廊を通り抜けて、しまひに行きつくところへ行つた。

婆さんはそこの入口をあけて私を押し込んで、

『私がまた來て伴れて歸つて上げますよ。』

と呼いた。

燐寸が摺られた。そして暗がりの中で、或見馴れた顏を私に見せた。

『戸口をおしめなさい。』

かういふ聲が聞えた。

私は戸口へ貫木を下ろしておいて、暖爐の方へ探り〳〵行つた。そしてそれへもたれかゝつて言つた。

『何か灯を附けてはくれないの？』

女は低い聲でくす〳〵笑つた。

『どんな灯を？』

『何だ、この淫賣奴。』と私は思つた。

私は一言も口を利かなかつた。女はといふと、私には殆んどその女が見えなかつた。彼女は、暗い夜中の空の凶惡な雲のやうに、全く暗がりに隱れてゐた。

『なぜ默つてるの？』と女は聞いた。その聲は横柄らしく響いた。

『この女は金持ちにちがひない。』

私はかう考へた。そして言つた。

『お前さんこそお話しよ。』

『あなた、遁げ出すといふやうなことを言つたのは本氣で言つたの？』

私は鋭い返答をしてやらうと思つたので暫く考へ込んだ。それから、徐りと、落ついて、併しひど〳〵侮辱する語調で言つた。

『いゝや、たゞお前さんの品行を試して見ようと思つただけだよ。』

女はもう一度蠟燐寸を摺つた。女の顏は赤らんでゐた。その二つの目は無遠慮に私に向つて輝いた。

私は少し極りが惡いやうな氣がした。私の目は暗がりに馴れて來た。私は女が奇態に硬ばつた體附きをして室の眞ん中に背丈一ぱいに突つ立つてゐるのを見た。

『あなたは私の品性なんか試さなくてもいゝんですよ。私はそんなことをして貰はうと思つてあなたを呼びにやつたんぢやありません。だけど私を理解して下さる氣がなければ、あちらへ行つて了ふがいゝわ。』

彼女は怒つて囁いた。彼女の聲には或冷酷な調子があつた。その聲には淫らな響きは

少しもなくて、寧ろ、或眞面目さが籠つてゐた。

私の向う側の壁に窓があつて、それが丁度、夜の底から刳り拔かれでもしたやうに見えた。それを見ると私は不愉快な氣持になつた。私は何だか窄にかけられてゐるやうな感じがした。そして尙ます〳〵氣持が惡くなつた。

『私はどこへも遁げられはしません。伯父に無理やりにこゝへ押し込められたんですもの。もうこんなところには辛棒が出來ない。私は首を縊つて死ぬんです。』

女は採石坑に自分自身を投げ落しでもしたやうに、不意に話しを止めた。

私は全く愕いてどぎまぎした。女は私の方へ寄り添つて息を喘がせた。

『では、どうしろといふんです。』と私は言つた。

女はぴたりと私の傍へ來て、私の肩に手をかけた。私にはその手が振へるのが感じられた。私もやつぱり體中が振へてゐた。そして兩膝がぐら〳〵した。私は空氣を求めて喘いだくらゐ暗がりが私の息を塞いだ。

『この女は氣がちがつてるのかも知れない。』と私は考へた。

けれども女は、とぎれ〳〵に泣いじやくりをして、熱した息を私の顏に吐きかけながら私の耳に呟いた。

『私には自分の生んだ小さい男の子がありました。みんながその子を私から奪つて、私をこの尼院へ閉ぢこめたんです。私はこんなとこにゐるのは堪りません。得う居りません。みんなであの子は死んだつて言ふんですよ。私の伯父や私の後見人や伯母がさういふんです。多分あの人たちがあの子供を殺したか捨てゝしまつたかしたんでせう。考へて見て下さい、あなた。私は二年たてば成年になります。それ迄はあの人たちに自由にされるのです。だけども私はこんなところには得う居ない。』

女は眞底からかう言つた。私はこの女を曲解してゐたことを感じた。私は彼女を可哀想だとは思つたが、併し同時に恐ろしかつた。半分氣ちがひのやうに思へて、言つてることを信じていゝかどうか怪しいからであつた。

女は涙の中に小聲で言つた。

『私は子供が欲しいんです。子供が出來ればこゝから追ひ出してくれます。私は自分の

生んだ小さい子が欲しいんです。一番はじめの子が死んだのなら、私はもう一人拵へたい。その子はあの人たちに取らせはしません。私の魂を剝ぎとらせはしない。後生ですから私を憫れんで下さいな。あなたの力で私を扶けて、私の奪はれたものを取り返して下さい、基督のために、どうか私の言ふことを信じて下さい。私は母です。淫賣ぢやありません。私は罪惡がしたいのぢやないのです。子供が欲しいのです。肉感の滿足を欲しがつてゐるのぢやありません。子供が欲しいのです。』

私は夢の中の人のやうであつた。私は彼女のいふことを信じた。だつて、一人の女が知らない人を呼びかけて助けを求めて、

『私は母になることを禁じられてゐるのです。私を助けて下さい。』と、かう言ふのである。それほど決心して自分の權利を哀訴するのだから、どうしたつて信じない譯には行かない。

そのとき私は、見たことのない私の母のことを考へた。私の母もやつぱり、女の情熱の力のために、無理やりに私の父の言ふまゝになつたのであらう。

私は彼女をいてかう言つた。

『お前さんを惡く考へてゐたのは許して下さい。聖母の名で私を許して下さい。』

けれども、女が私の腕にくるまつてゐる間に、すきを狙つてゐる考へが再び私の心を突き貫けた。

『この女が私を欺して、ほかのものを相手にしてやるのと同じやうな冗戯をやるとしたらどうだらう。』

彼女は自分の身の上をすつかり私に話した。彼女は錠前師の一人娘であつた。伯父は火夫で、のんだくれの下等な男であつた。夏には汽船に傭はれたが冬は港でかせいだ。彼女は家なしの浮浪人であつた。

この女が十三のときに雙た親はヴォルガ河で、乘つてゐた船が航行中に火事をやつたので溺死した。女は十七の年に貴族の或若息子と通じて子供を生んだ。

彼女のやさしい聲は、私の精神の上に溢れ漲るやうに思はれた。私は女の暖かい腕を首のぐるりに感じた。女の頭はぢつと私の肩の上に乘つてゐた。私は彼女の言葉を聞く

につれて、凶惡な疑問の蛇が私を貪り喰つた。

われ〳〵は、われ〳〵のために基督を生んで、謙抑に彼のあとについてゴルゴサへ行つたのは女であるといふことを忘れてゐる。 また、この「女」といふものが、すべての聖徒や、過去のあらゆる偉人たちの母であることをも忘れてゐる。 われ〳〵はわれ〳〵の鄙しい淫らな感情から、女の價値のすべての意義を亡ぼし、女をわれ〳〵の歡樂の對象物に貶し、勞働を荷負はされた家畜と同じ水準まで下げたことをも忘れてゐる。 それだから女は、最早救濟者を一人も生まないで、子供の代りに、なさけない畸形ものばかりを生み出すのだ。

彼女はこの尼院のことをいろ〳〵話した。 私は、自分の意志に反して拘禁されてゐるのはこの女ばかりではないといふことを知つた。

そのとき彼女は、私をいたはり抱きながら不意にかう言つた。

『私はこの尼院に大好きな小さい女の友達があるのよ。 その人は金持の家から來た、ほんとの生娘なの。 まあ、その人こそどんなに悲しがつてるか知れない。 あの人も矢つ張り子供が拵へたいのよ。 子が出來れば追ひ出しますからね。 そしたら名附けのお母さんのところへ行くんですつて。』

『おや〳〵。 不幸な女がまた一人……。』

私はかう思つた。

神の絶大な智慮と公平と神の法令の公平に對する私の信仰の破片が、また一つ粉碎された。單にさうした規則の勝利を保全するだけのために、こんなに亂暴な事をし得るものがゐるだらうか?

クリスティナはそつと私の耳に囁いた。

『今言つた私の友達をあなたに紹介してもいゝこと?』

私はそれを聞いて、自分は全くこの女に對してすまないことをしたと思つた。 私は許してくれと賴みたかつた。 私は、ちやんと女性の權威を尊重してゐる女でなくては、たしかにこんなことは言へないものだと思つた。 私はこの女を疑つてゐたのを自白した。

すると女は私を突き退けて、暗がりの中で泣いた。 けれども私は強ひて慰めようとも

しなかつた。

『あなたは私があなたをこゝへ呼んで來て貰ふのが恥づかしかつたとは思つて下さらないの？』

女は責めるやうに言つた。

『私ほどの健康と美しさとを有ちながら、男の人に向いて施しものをでも賴むやうに愛を求めるのは、私に取つては何でもないことだつたとお思ひですか？　私はどういふわけであなたを信用したんでしたらう。　私はあなたをいかつい顏をした、眞面目な人だと思ひました。　めつたに口もお聞きでないし、若い尼たちを相手にもなさらない。　あなたの髪は顴顬のあたりが白髪で斑になつてゐます。　その上に、あなたは――なぜだつて事はつきり言へないけれど――何だか人のいゝ方のやうな氣がしたんです。　あなたが一番はじめのときに、あんなにそつけない口をおきゝだつたときには、私は本當に泣きました。私は自分で自分を騙したんだと思ひました。　それから　たう〳〵決心して、あなたを呼んで來て貰つたんです。』

『許しておくれよ。』

と私は言つた。

クリスティナは私に接吻した。

『神さまはあなたを許して下さるわ。』

さつきの婆さんが戸をこつ〳〵叩いて小聲で言つた。

『もうお分れなさい。　ぢきに朝のお勤行の鐘が鳴りますよ。』

婆さんは私をつれて歸る途中で言つた。

『ほんの一留でいゝから下さいよ。』

私はなぐり倒してやりたかつた。

私は五日間クリスティナと暮した。唱歌者の尼や見習尼たちがあんまりうるさくねだるので、それ以上クリスティナと一緒にゐることが出來なかつた。　それに、私はこの經驗を熟思するために一人になる必要を感じたからでもあつた。　もし、人の母になるといふことが女の願ひであるとしたら、世間の人はどうしてそれを禁ずることが出來やう？　子

供等といふものは、これまで常に、新しい生存のはじまりで且つ新しい力の傳送者ではなかつたか。これからさきでもいつもさうではないだらうか。

私にはその尼院をさつさと出て行くべき理由がもう一つあつた。といふのは、クリスティナが彼女の友達を私に紹介したからであつた。その女は青い目をした、色の白い、きやしやな少女で、私の亡くなつたオルガにそつくりであつた。この女の顏には純潔が表はれてゐた。そして同時に非常に沈鬱な容子を帶びてゐた。彼女はひどく私の心を引きつけた。クリスティナは全力を盡して私をその女へ附けようとした。併し今度はわけがちがつてゐた。といふのは、クリスティナは處女ではなかつた。けれどもジュリア——その女の名前はジュリアと言つた——は全く純潔な女であつた。だから私の考へでは、ジュリアの配偶者になる男は矢張り純潔な人間でなくてはならなかつた。その上に、私は自分で自分を信用してゐず、自分自身の性質が解らなかつたからである。

私はクリスティナに告別をした。彼女は少しは涙を流して、これから手紙をくれろと賴んだ。そして、若し妊娠したら知らせる約束をした。それから、秘密な、手紙の宛て

先きを言つといてくれた。

別れてから間もなく私はクリスティナに手紙を出した。クリスティナは、美しい手紙をかいて返事をよこした。その次に私は再度手紙を出したが何の返事も來なかつた。彼の女の手紙が郵便局に遲滯してゐたゝめに、その返事を受け取つたのは一年半も經つてからであつた。その手紙には、男の子を生んで名前をマトヴとつけたといふことが知らせてあつた。その子は、體の丈夫な快活な小さい子で、クリスティナもその子も、彼女の伯母のところで暮してゐるのであつた。伯父は死んで了つた。全く酒を飲み過ぎて死んだのであつた。

『もう私は自分のしたい通りに出來ます。もし來て下さるならいつでも歡んでお迎へします。』

かう書いてゐた。

私は自分の息子と女房とに——言はゞ五六日の間の妻子に——會ひたくもあつた。けれども丁度その時には、正しい路に這入りかけてゐた。それで私は手紙を書いて、今は

お前をたづねてやることは出來ない、併し先では訊ねるからと言ひ送つた。

併し、クリスティナは、後には版畫や地圖を賣る男と結婚した。そして二人でリビンスクに世帶を持つた。

私は自分の經驗上で、絶對に恐怖といふものを持たない。そして自己のために全力を以て闘ふ決心を持つた人間を、はじめてクリスティナに見出したのである。けれども、その當時には、さういふ特質の偉大さとその意味とを充分に玩味し得なかつた。

十九

この、クリスティナとの挿話の後、私は或町で働いて見た。けれどもそんなことはばかげた、狹い生存のやうに思はれて、私は厭であつた。私は勞働者等があゝして大びらに、恥ぢる氣もなく傭主の桎梏に服從してゐるのが厭であつた。彼等は皆んな、主人に對する全での態度で以て、言はゞ、かう言つて叫んでゐるやうに思はれた。

『さあ私を取れ。私の體を食ひつくしてくれ。私の血を飲んでくれ。私は世界中に住み場がないのだ。』

彼等と一緒になつて、暮すのはよくなかつた。彼等は酒を飲んだ。そして何んでもない瑣細なことで口論したり喧嘩をしたりした。夜晝となくぐん〳〵働く間單調な歌を謠つた。彼等の傭主は彼等を監視して、肥えて金持になつて行つた。麵麭の製造場は汚くて人がごた〳〵澤山ゐた。そこでは人々が犬のやうに眠つた。惡いことをするのと杜松子酒とが彼等の唯一の慰めであつた。私が彼等に、人生といふものはむちやくちやに出

來てるものだと言ふと、彼等はたしかに私のいふことに耳を傾けて、澁い顏をして、それにちがひないと同意した。けれども、人間は神を求めなければいけないと言ふと彼等は息をついた。けれども私の言葉は彼等に何の感銘をも遺さなかつた。

ときく彼等は私を調弄つた。——それこそどういふ譯だか解らない——そして用捨もなく私を嘲笑した。

私は町といふものを好かなかつた。斷え間のない交通の騷がしさ、めまぐろしさが私には堪らなかつた。ひつきりなしの商賣のために聾になつた町の人間たちは、私には全で沒交渉であつた。

そこには、多くの飲家や、澤山の寺があり、大きな建物が幾筋もずらりと列んでゐた。そこには人が大勢集つてゐるけれど、生活は狹く限られてゐた。だれ一人自己自身の生活をしてゐるものがなかつた。だれもかれも一つの仕事に縛りつけられて、丁度鎖でつながれた犬のやうに、一生涯同じ戸溝の中で動いてゐた。

そのごつた騷ぎの中に、さうしたすべての物音の中に、疲勞の音が鳴り響いた。寺院の

鐘ですら絕望的な諧音を出した。私はすべてのものが間違つてゐる、あるべきやうになつてゐないといふことを心に感じた。

ときく私は自分自身を笑はずにはゐられなかつた。けれども笑つても氣分は愉快ではなかつた。それといふのは、私にはあらゆる事に只誤りと僞りとしか見えなかつたけれども、どういふわけでそれが僞りであるかといふことが解らなかつたからであつた。それがために私は尙更陰鬱になつた。私は深い淵の中へ沈んで行つた。

夜になると私は自分の自由な生活を回想した。殊に、野天で明かした夜々のことが考へ出された。

田舍では地面が圓く見える。あらゆるものが理解し得られ、すべてのものが心に觸れる。だれでも、小さな單純な子供となつて、暖かい黃昏にくるまり、星の出てゐる空を天蓋に戴いて、空とともに星の側を徐に通りながら、手の平の上に寢轉ぶやうに地面に橫はるのである。

疲れはてた體は、草や花の强い香ひでせいくする。丁度搖籃の中へ橫になつてゐて、

目に見えない手で以て、しづかに搖すつて眠らせて貰ひでもするやうな氣がする。

蔭が草の葉をさら〳〵鳴らせて滑る。と、四方に咽きとそよぎが起る。地鼠が穴から這ひ出した。小さい聲で鳴くのが聞こえる。ずつと向うの森の緣に、何か薄黑い、形が現はれる。牧場の馬らしい。一瞬間立ち止つて、それから溫い闇の海の中に消えて了ふ。するとまた他のところに新しい形がふいと現はれる。夜通し、大地の眠りの沈默な衞手が——夏の野の柔かな影が——音もなく野原を橫切つて滑つて行く。ぐるりには、生命が、言はゞ、床について、穩かなまどろみに休んでゐるのが認められる。そして自分の體が草を挫きつぶしたのが、良心に苦しく感じられる。

夜鳥が一羽、音もなく傍を飛び過ぎる。土の斷片の一つが生命を感發され、無理やりに脫け出して、憧憬を注がれて、自分自身を滿足させるために高く飛び去つてゐるのである。

二十日鼠が草の中でがさ〳〵やつてゐる。すると、一つの小さな柔かい球がこちらの廣げた手の上を滑り越える。こちらは愕くりして、尙より强く生の豐滿を感じる。土そ

のものが足の下に生命を帶びて來る。そしていかにも活氣に充ちたやうに、そしていかにも親しさうに、愉快らしく見える。

われ〳〵には土の息が聞こえる。そして彼女の夢の性質や、彼女の胸にどんな力が窃かに發育してゐるか、彼女は明日はどんな風に太陽を見入るであらうか、明日になれば、彼女の光輝ある、至愛なものをどのやうに喜ばすだらうかと、それを推測したくなる。

われ〳〵は彼女の胸の上に休息し、その胸の中に吸ひ込まれる。われ〳〵の體は、最愛の母の、暖かい香氣のある血に飽和されて、背丈が增して來る。われ〳〵は自分自身が永久に大地の子であるといふことを知つて、急に感謝の湧く中に、

『おゝ地よ、私の最愛するものよ。』と考へる。

治療の力の目に見えない流れが大地から噴き出る。そして芳ばしい香りが小さい流れのやうに空中を流れる。地面は空間に搖らめく香爐のやうである。そしてわれ〳〵は、その香料の上に燃え輝く炭である。

星は、日が上る際の自分の美しさを充分に見せようとして小止みもなくちら〳〵と輝

く。默想と眠りとは、われ〳〵を撫で劬はり、われ〳〵を醉はせる。そして、神がゐる——どこかに光輝ある神がゐるといふ、輝いた希望の光りが、焰のやうにわれ〳〵の魂を突き通す。

『求めよ。さらば神を見せしめん。』

何といふ美しい言葉であらう。決して忘られてはならない言葉である。眞に、人間の理性に相應しいからである。

二十

春が來ると、私は西比利亞へ行く積りでその町を出た。西比利亞は私が前から人が賞めてゐるのを聞いた土地である。

けれどもそこへ行く途中で、私は、一人の人に引きとめられた。その人は神に達する正しい道を私に指示してくれ、そして私が生きてゐる間、取り縋るべき或物を私の心に與へてくれた。

私はバアムからヴィアーコトヴィエへの路上で彼に會つた。私はそのとき或森のはづれに横たはつて、茶を出す湯を沸かすために火を燃やしてゐた。

それは眞午時で、太陽は焦る程暑く照りつけてゐた。空氣は或立木が吐き出してゐる、强烈な、油のやうな樹脂の香ひを負はされてゐた。私は非常に息苦しかつた。鳥たちでさへも炎熱を感じて森の底に遁げ隱れて、そこで、彼等の歎ばしい生活を歌ひ送つてゐた。森の緣はすべてが靜かであつた。あらゆるものが皆今にも太陽の光線の下に熔け出

しさうに見えた。木も岩も、それどころか、全く私自身の體までも、今一瞬間たてば、すべての種類の色をした、濃い流れになつて流れ去りでもしさうであつた。

私は不意に、一人の男が、大きな、震へた聲で歌ひながら、バイアムの方からやつて來るのを認めた。私は耳を傾けた。見ると一人の巡禮である。白い袈裟をかけた體の小さい男で、帶に茶沸し鍋を釣るし、背中に柔皮の背嚢と、何か料理用の道具を背負つてゐた。

彼は、遠くから私に向いて叩頭いて、作り笑ひを見せながら、快活に歩いて來た。彼は普通の巡禮者であつた。このあたりには、かうした厄介な奴が澤山ゐた。彼等には、信仰的な浮浪も、なんのことはない、自分を肥やすための商ばいであつた。その他の點でも、彼等は野鄙な無教育な階級で、所中嘘ばかり吐き、杜松子酒に飲み浸つてゐる。人のものを食ひ潰して平氣である。私は心底から彼等を憎んだ。

彼は帽子をさし上げて、頭を搖すぶりながら私の傍へやつて來た。彼の顴顬の動脈が奇態な風に鼓動し始めた。そして彼は椋鳥のやうにぶつ續けに喋つた。

『やあ、いかゞです。暑いぢやないか。地獄よりか二十二度暑いや。』

『お前さんはもう長い間地獄から出てゐるのかい？』

『六百年さ。』

彼の聲には。どことなく、すが〳〵した愉快な響きを持つて居た。頭の小さい、額の出ばつた男で、蜘蛛の巣のやうに皺だらけな顏をして、綺麗な小さい灰色の鬚を生やしてゐた。併しその蒼色の眼は若い者の眼のやうに光つてゐた。

『面白さうな奴だ。』と私は思つた。

彼はやたらに喋り拔いた。

『ウラル連山か。はアはア、あれはすばらしいものだ。神は絶大な美術家のやうにこの地上を飾つてゐる。神はすつかりの森や河や山を、いかにも美しく整頓したものだ。』

彼は旅行用具を取り下ろして、若い山羊のやうに飛んだりはねたりした。そして、私の鍋の中の湯が煮え立つてゐるのを見ると、鍋を火から取り移して、二人が古くからの同室者でゝもあるやうにかう言つた。

『私の茶を入れようか？　それとも自分のが飲みたいかい？』

私がそれに對して返事をする機會を持たない内に、彼は問題を取り極めて了つた。

『さあ、二人で私の茶を飲まう。いゝ茶だよ。或商人のお女房がくれた非常に高い茶だ。』

私は彼を笑はずにゐられなかつた。

『お前さんは本當に山羊だ。』

『山羊だつて構ふものか。私は暑いので少々まゐつてゐる。まあ待つてくれ、すつかり休んだらお前を愕かしてやるよ。』

彼の容子は、どことなくサベルコを思ひ出させる或物があつた。私は彼と冗談を言ひ合ひたい氣がした。けれども二三分間の後には、私は口をあんぐり開けて、彼の冗談に耳を傾けてゐた。彼の言葉は奇態に親しみがあつて併も同時に新しく響いた。私は彼が話してゐるのでなくて、私自身の心がかうした日の照り渡つた日の歡びを謠つてゐるやうな氣がした。

『まあ見給へ、これこそ本當の天國ぢやないか？　山々がいかにも壯嚴に太陽へ高まり、

そして、森が頂上まで這ひ上つてゐる。お前の足の下の小さい草の葉は生命の光りへ向いて飛んでゐる。すべての造化物が大歡喜の頌歌を謠つてゐる。それだのに、おゝ人間よ、なぜお前は――地上の支配者たるお前はなぜむつゝり默つて坐つてゐるのだ？』

『この奇態な鳥は何といふ鳥だらう？』

私はかう考へながら、彼を試さうと思つて言つた。

『だけど、私が悲しい考への餌食になつてゐるとしたらどうだい？』

彼は地上を指さした。

『あれは何だ？』

『地だ。』

『さうぢやない、もつと上を見て御覽よ。』

『草を見ろつていふのかい？』

『もつと上。』

『あれかい？　あれは私の影法師だ。』

『さうさ、あれはお前さんの體の影だ。けれども思想はお前さんの心の影だ。何が怖いのだい？』

『私は何んにも怖いものはない。』

『嘘を吐けよ。怖くないならお前の考へはもつと愉快なわけだよ。悲しみは恐れの子だ。恐れは不信仰の子だ。さうら、そこだよ。だけどまあその茶をお飲みよ。』

彼は小さい錫の入物へ茶を注いだ。そしてのべつに話し出した。

『私はどこかでお前さんを見たやうな氣がするぜ、え、おい？ ヴァラーム律院にゐたことがあるかい？』

『あるよ。』

『いつ？』

私はいつそこにゐたかを彼に話した。

『ちや、あそこでちやない。私はお前さんの赤い頭をどこかで見たやうに思ふんだ。お前さんは實に特徴のある顔をしてゐる。あゝ、私はソロヴキで會つたのかも知れない。』

『私はまだソロヴキへ行つたことはないよ。』

『まだ行つたことがない？ 何といふ憫れなことだらう。古い律院で非常に立派なものだ。まあ行つて御覽よ。』

『それではお前さんはこれまで私に出會つたことはないんだ。』

私はかう言ひ切らなければならないのを悔いるやうな或感情を持つて言つた。

『そんなことはどうでもいゝ。』と彼は叫んだ。

『これまで私に會つたことがないにしても、ともかく今會つてら。ちや、お前さんに非常によく似た、だれか他のものだつたに違ひない。それでも全く同じことぢやないかい？』

私は笑つた。

『どうして同じだい？』と私は聞いた。

『それはお前、どうしたつて同じ譯ぢやないか？』

『だつて私は私、さつきのはまた他の人間だ。』

『お前さんの方がその男よりは優だらうな。』

『どうだか。』

『さうさね、私にも解らないね。』

私は彼の顔を見た。そしてむかついた、もじ〳〵するやうな氣分を見た。こんな奴を選んでべちや〳〵話しをしからである。

けれども彼は茶を啜つて、また喋り出した。

『さうだ。あそこで合つた男は目がたつた一つしけやなかつた。そしてそれを非常に苦に病んでゐた。一たい片目の跛の奴等と來たら——體の上でさうなのも精神上のでも同じだが——皆な非常に我慾なものだ。お前さんは私を片目か、それでなくば跛だと思ふかも知れない。併しお前さんがそんなことを私に言つたらひどい目を見るよ。今言つた男もやつぱりさういふ性質の男だつた。その男は、人間はみんな惡者だつて私に言つた。私はかう言ひ返してやつた。「友達よ、お前もやつぱり馬鹿でなけりや惡者だよ。二つの内どちらなりと好きな方を選ぶさ。併し人がお前をどう見やうが、そんなことはどうでもいゝんだ。たゞお前が自分自身をどう見るかが肝腎だ。いゝかい？ それだからお前、われ〳〵人間は片目でおまけに盲目だ、それは外でもない。われ〳〵はいつも他人ばかりを見、他人の黑い汚點を探してゐて、われ〳〵の光りの奇態な暗さの中に息を詰らせてゐるからだけれども。もしわれ〳〵がわれ〳〵自身の光りで以て他人の暗がりを照してやるなら、そのときにはあらゆるものがわれ〳〵に愉快になる。人間は自分自身以外には何ものにも善を見まいと頑張つてゐる。だから人間にはこの世界全體が淋しい荒野のやうに見えるのだ。』

彼は微笑みながら話して私の顔を見た。私は丁度、森の中で行き迷つたものが、梟の叫び聲を救ひの使ひが來たと間違へたのではないかと危ぶみながら、熱心に遠くの鐘の音に耳を傾けでもするやうに、彼のいふことを傾聽した。

私は彼の話から、彼は多くを見、多く考へて來た男だと推定した。けれども彼は私を非常に横風に取扱つてゐるやうに思はれた。それでなくては、私に冗談を言つたり、彼のあゝした子供らしい眼附をして私に微笑みかけたりしない筈だ。私はアントニアスと

知り合つてから以來、人の笑ひを疑ふことを覺えた。

お前は誰かと私が聞いたのに答へて彼はかう言つた。

『私はエヒュディエルといふものだ。一般の人には道化ものゝやうにされてゐる。併し私は私自身の一番いゝ友人だ。』

『お前さんは僧籍にゐるのかね？』

『僧侶だつた。けども長い間ぢやなかつた。といふのは私は追ひ出されて六年間サスダルの律院に閉ぢ込められてゐたからだ。どうした譯だつて？　私が敎會堂で人々に說敎をしたからだよ。親愛すべきその人々が、單純な心で以て私の言葉を誤解したからさ。その人たちは引つぱたかれた。そして私は裁判官の前に引き出された。それでお終ひよ。どんなことを說敎したかつて？　私はすつかり忘れて了つた。隨分前のことだもの。十八年ぐらゐ前だらうよ。何事でもそのくゐ年限が經ちやだれだつて忘れることが出來るさ。私はあらゆる種類の思想の渦卷の中に生きてゐた。私はその思想をどれ一つだつて口では言ひ現はさなかつた。

彼は笑つた。微笑が顏中の一々の皺に湛えられた。彼はすべての山や森を自分で掬へ出してもしたやうにぐるりを見廻した。

空氣が少し涼しくなると、二人とも旅程を續けた。

その途中で彼は言つた。

『お前さんは實際誰だい？』

私は再び止むを得ず、アントニアスに聞かれたときと同じやうに、私の込み入つた過去をすつかり私の目の前に披げなければならなかつた。

私は自分の子供のときのことや、ヒラリオンやサベルコのことを話した。すると相手の爺さんは笑つて大きな聲で言つた。

『はゝゝ隨分すばらしい奴だね。本當の、神の靈感を受けた馬鹿たちだ、ね、おい？　二人ともわれ〳〵の露西亞の土に生えた選り拔きの花だ。本當に立派な人間だ。』

私にはこの讚辭が何のことか解らなかつた。私は彼が喜ぶのみを見て奇態に感動させられた。彼は思ふさま笑ふために立ち止まらなければならなかつた。彼は頭を反り返ら

せて嬉しがつて大きな聲で叫び怒鳴つた。彼は自分の愉快を共にするいゝ友達を空の中に持つてゐでもするやうに見えた。

『お前さんは、いくらかサベルコに似てるよ。』

私は親しい語調でかう言つた。

『何だつて？　本當にその男に似てるかい？』と彼は叫んだ。

『その男に似てるとは嬉しい。ね、お前さん、神聖な敎會が過去にわれ〳〵を迷はさなかつたら、露西亞は今どんなに異つた國になつてるだらう。あゝ〳〵。』

彼のその言葉の意味は解らなかつた。

私はティトヴのことを彼に話した。彼は私の義父をそつくりそのまゝ目に見るやうに思はれた。

『何といふ厭な奴だらう。私はさういふ種類の奴を知つてるよ。さういふ奴を知つてる。ばか、な卑怯な、剛慾張りの豚だ……』

彼はかう言つてティトヴに判決を下した。

それからアントニアスのことを話すと、彼は一寸の間考へ込んで、それからかう言つた。

『あゝ、そいつも信じないタマスだ。——だが一々のタマスがみんな天才ぢやない。自分自身の愚鈍から不可思議論者になつてるものは、いくらもゐる。』

彼は一匹の無遠慮な大蜂を威し退けた。

『あつちへ行つちまへ、ばかな奴。私の眼の中へぢきつけに飛び込みやがる……あつちへ行けい。』

かう彼は言つた。

私は彼の言葉を一言も聞き落さないやうに注意深く耳を傾けた。その一語〳〵は、いかにも深い思想から出て來たものゝやうに思はれた。私は、全く懺悔僧に話すやうに彼に話した。尤も神のことをいふとなると時々躊躇した。私は何か物を失くしでもしたやうに、不安な、そして神經がとげ〳〵するやうな心持がした。

しまひには神の像が私の心の中にぼやけて了つた。私はその上に積つた年代の塵を淨

めたいと思つたけれど、私はすでにその心像を擡りに擦つて、もう何んにも殘らないでゐるのを認めた。 さう思ふと私の心臟は苦しい動悸を打つた。

けれども、例の老人は、私に勇氣を附けようと思つて叩頭いた。

『何んにもしないがいゝ。 何んにも恐れちやいけない。 いつまでも默つたまゝでゐたら、それこそ私に嘘を吐くのぢやなくて、 自分自身に嘘をついてるのだ。 お言ひよ。お言ひよ。 何か撲ちこはしたからつて愕かないがいゝ。 その代りに何か新しいものを拵へろよ。』

私のすべての言葉は直ぐに彼の中に反響を見出した。 かうして私が彼を信ずる心が段段と增して來た。

二十一

夜が二人を襲つた。

『止まれよ。 寢れるところを見附けようぢやないか。』

彼はかう叫んだ。

私たち二人は山から裂け落ちた、大きな岩の下に體のかばひどころを見出した。 岩の上には灌木が生えてゐた。 二人は、その暖かい蔭に坐つて、火を燃やして茶を拵へた。

『お父さん、どんな話を聞かしてくれるんだい?』と私は聞いた。

彼は微笑んだ。

『私の知つてることはすつかり話すよ。 たゞ私の言ふことに眞理の肯定を求めようとしてくれてはいけない。 私は敎へようといふ氣は少しもない、只話しをするだけだからな。肯定といふものは、その人に取つて人生の道程が危險で、人間の發達が有害な連中に要り用なのだ。 彼等には人々が眞理の光を彼等の心の中に燃やすにつれて、その光が常にま

す〳〵明るく輝くのが見える。彼等はその光りを見て怖れる。彼等は急いで自分に適するだけの眞理を捉へる。そしてそれを揑ね上げて、小さい麭麵を拵へて全世界に向つて叫ふのだ。「さあ眞理だ、混ぜものゝない、心の糧だ」と叫ぶ。實際さうだ。たしかに永久無限にこれなんだ。かうした、われ〳〵の敵で同時にすべての人の敵である惡者たちは眞理の顏の上に坐り、彼女の喉を締めて、あらゆる仕方で以て彼女の力の發育を妨げてゐる。けれども私が今日言ひ得ることはたつた一つしかない。それが明日はどうなるか私には解らない。といふのは、これは忘れないでゐて貰ひたいが、一體人生には、まだ本當の正當な主人といふものが現はれないんだ。その眞の主人が出て來るときには、その人がどんな法律を宣言するか、どういふやり方を是認するか、何を撤廢するか、また、どんな種類の寺院を建てるか、それは私には解らない。嘗て使徒パウルは、「すべてのものが救ひに役立つ。」と言つた。多くの人がこの言葉によつて物事を極めた。その結果彼等は弱い無能な人間になつたのだ。』

私はかういふ風な話を聞いたのはこれがはじめてゞあつた。私は自分自身の人格の支

へ柱を求めてゐる。それに人間がかう言つて自身の自己を否定するのである。だから彼の話は私には異樣に聞えた。

それは丁度、彼が閉つた戸の前で私を捉へてゐて、その戸を開けてもくれず、また、その後に何が匿されてゐるかといふことすら言つてくれないやうなものであつた。私はいらだゝしくなつた。そしていくらか悲しい氣持になつた。老人の言葉は私にははつきり解らなかつた。彼の會話からときゞ〳〵青い火花がきらめきはじめた。けれどもその火花はたゞ私の目を盲しただけで、私の心の暗がりを照すことは出來なかつた。

『その晩は月夜であつた。黑い蔭が私等を取り卷いてゐた。森は沈默して丘へ向けて這ひ上つてゐた。山々の峰の上には、いくつもの星が、火の鳥のやうに木の枝の間に瞬いた。どこか、われ〳〵から遠くだとは思へないところに、小川が私語いてゐた。梟が一匹、森の中で間を置いては鳴いた。その間、老人が、活氣を感發されてはゐるが、併し靜かに――話すのが、夜の空氣の中に高下した。

何といふ不思議な老人であらう。彼は今頰にとまつたこがね蟲を捉へて、手の平に握

りながらこんなことを言つてゐる。

『小さい奴よ、どこへ行くんだい？　さうら。草の中へ遁げろ。』

私は嬉しかつた。私は今でもかぶと蟲が大好きで、彼等の、花や草の間に送る神祕な生活を非常に面白く思つてゐるからである。

私はこの老人にあらゆる種類の質問をかけた。そしてそれに對して、手短な、はつきりした答を求めた。けれども彼は、私が解いてくれといふ問題を甘く避けるのであつた。全くのところ、彼は恰もさういふ問題を飛び越えた。

私は彼の活氣のある顏附が好きであつた。その顏中には二人の宿營の焚火の赤い反射が漂うてゐた。そして私の焦れ求めてゐる、かの靈的な歡喜を以て振へてゐた。私はそれを見て羨ましさに充たされた。この老人は私よりは二倍も長く生きて來たのである。二倍よりももつとかも知れない。それだのに彼の心は麗かに、はつきりと輝いてゐた。

『私は或人が、信仰は幻影的のものだと言つたのを聞いたことがある。お前さんはそれに對してどうお言ひです？』

私はかう言つた。彼は答へた。

『その人は自分が何のことを言つてゐるのか全で解らなかつたのさ。だつて信仰は森嚴な、創造力のある感情だもの。それは活力の過多なところからして人間に生れたのだ。この力は、斷えず人間の若々しい心を亂し搖すつて、それを活動に驅り立てる、力强い衝動だよ。けれども人間といふものは外部からあらゆる風に妨害を受けて、自分の行動に制限や束縛を加へられてゐる。すべてのものが、人間は自分の心の底に横はつてゐる生きた寶は培はないで、穀物の種を蒔いたり鐵を煉熔けなければならないやうに言つて要求してゐる。そこへ持つて來て、人間はまだ、自分のすべての寶を利用する方法に馴れてゐない。實際、まだそれが解つてゐないのだ。人間は自分の心の騷亂を恐れ、奇怪なことを生み拵へ、自分自身の汚れた心の反射を恐がつてゐる。自分の心の實相が解つてゐないものだから、自分の信仰の形式や、彼自身の影へ——といつてもいゝだらう——さういふものへ恭しく頭を下げてゐる。』

私は、今、そのときにこの老人が言つたことが解つたやうに僞ることは出來ない。けれ

ども私はむつと怒つて言つた。

『お前さんは私が聞く肝腎な質問に答へない内にはこの場を立たしはしないぞ。』

かう言つて、それから、今度は真面目に彼に言つた。

『なぜお前さんはたえず神のことは避けて言はないのか。』

彼は愕いた容子で私を見た。そして答へた。

『けどもお前さんよ、私ははじめからずつと神のことを言つてるぢやないか。お前さんにはそれが感附かれないのか？』

彼は膝をついた。そして焚火に顔を照されながら、片手を私にくれた。そして同時に低いけれど感銘の強い聲で言つた。

『どういふ神だい？　奇蹟を造り出す神かい？　その神はわれ〳〵の父か、それともわれわれの心が生んだ子か、どつちだ？』

私は何と答へていゝかまごついたので、愕いて自分のぐるりを見つめた。老人は狂人のやうに喋つてゐるやうな氣がした。黒い蔭が二人のぐるりに屯して潜んでゐた。森から私語が聞えた。そしてそれが木炭のしづかにぱち〳〵燃える音と、小川のせゝらぎとを溺らせた。私は膝まづかうとしかけた。けれども老人は全で誰かと爭論でもしてゐるやうに大きな聲で話し出した。

『神は人間の弱みが造り出したものではない。人間の力があり餘つて拵へたのだ。神はわれ〳〵の中に生きてゐる。われ〳〵の外には生きてゐやしない。けれども人間は、自分の心に關した疑問に苦しんで、われ〳〵の心の外へ神を持ち出したのだ。そして、われわれの誇りを――われ〳〵の意志の制限を忍んだことのない、われ〳〵の誇りを抑へつけるために、神を一つの高い絶頂へ置いたのだ。いゝかい、人間は自分の力を弱みに換へてしまつたのだ。力の發達を强制的に妨げたのだ。完全の理想が餘りに急いで造られた。これが悲しい禍の原因になつてゐる。人間は二種類に分けられる。一つは斷えず神を造り出してゐる人間と、もう一つは、常に、またこの先も永久に、さういふ人々を支配しようとする優勢な衝動の奴隷だ。そしてまたこの全世界の奴隷だ。彼等はこの力を捉へて、人間の敵で、そして全世界の審判者支配者たる神の存在を人間の外に確立す

るために使つたのである。彼等は基督の靈の映像を塗り消し、基督の誡律を破つた。それは基督は全く彼等に反對したからだ。人間が人間を支配することに反對したからだ。』

老人の顏には微笑が纏はつた。彼は絕大な歡喜にわれを忘れた。そして全きり醉ひ果てゝゐた。私は、彼が狂人めいたことを喋つてゐるやうな氣がした。けれども私は彼の言葉を聞いて苦痛や悲しみを感じたにも係はらず、それでも彼を仰慕する心を隱すことは出來なかつた。

私はあらん限りの熱心を注いで彼に耳を傾けた。

『けれども神を造り出す人々はまだ生きてゐる。さう早くは死にやしない。彼等は再び窃に急がしい目をして新しい神を造つてゐる。お前さんが全心をこめて渴仰する實際の神を——美と知識と正義と愛とを備へた神を造つてゐる。』

彼の言葉は私に取つては衝擊であつた。けれども私のよろめく足を踏みしめさせ、言はば私の手に武器を授けた。私のぐるりにはそつとした物の蔭がさゝやつて、その翼で持つて私の顏を撫でた。私はよぢけ立つた。大地が私の足の下で渦卷き廻つた。

『惡魔がおびき出す言葉で人を誘惑するといふのが本當だとしたらどうだらう？　この老人が私をひどい大罪に釣込むために罠を拵へてゐるとしたら？』

私はこんなことを考へた。

『おい、神を造るその人たちといふのは誰だい？　そしてお前さんが期待してる主人といふのは誰だい？』と私は言つた。

老人は女のやうにやさしく笑微んで答へた。

『神を造り出すのは民衆だよ。數へ盡せない普通の群集だよ。敎會が褒める殉敎者よりもつと偉い、神聖な殉敎者だ。それが奇蹟を仕出かす神だ。私は民衆の精神を信じてゐる。——私が大きな力を認めてゐる不滅な民衆の精神を。——その精神こそ、疑ひを許さない、生活の只一つの根元だ。これまで存在して來た神や、まだこれから現はれて來る神の唯一の兩親だ。』

『この爺さんは馬鹿だ。』と私は思つた。

そのときまでは、私は、たとへそろ〳〵でも、眞理へ向つて上つて行くやうな氣がし

てゐた。私の精神に取つては、彼の言葉は一度ならず、上を指してゐる、燃え輝く指のやうに思はれた。私は彼の言葉を苦痛ではあつてもためになる燒傷、ためになる痛刺のやうに感じてゐた。けれども今は私の心は俄に悲しくなつた。私は激しく失望して、眞理へ上つて行く途中で立ち止まつた。色んな性質の火が私の胸の中で暴れ狂つた。私は情なかつた。同時に不思議に嬉しかつた。私は全く困惑した。

『お前さんは多分百姓たちのことを言つてるのだらうね。』

私はかう聞いた。

彼は大きな聲と威嚴のある語調で言つた。

『私は世界中の勞働階級のことを言つたのさ、彼等の結合した力のことを言つたのだよ。この力が神を造る只一つの永久な根元だ。民衆の意志がいかに覺醒されてゐるかを考へて御覽よ。これまで暴力で以て分裂されてゐた人間のあの大きな團體が今はずん〳〵結合して行つてる。今でも多くの人は地上のすべての力を一つに合同して、その中ら、宇宙を抱擁するやうな、立派な美しい神を造り出す手段を求めてゐる。』

彼は、恰も、私だけでなく、森や山々やその眞夜中の時間に目覺めつゝあるすべての生物が彼の言葉を聞くのだといふやうに、大きな聲で話した。

彼は飛び立たうとしてゐる鳥のやうに身振ひをした。けれども私にはすべてが一つの夢のやうな――私を侮辱する夢のやうな氣がした。

私は心の中で私の神の畫を形造つた。私は神を臆病な、苦惱をしてる人間どもの、陰黑な階級の前に突きつけた。そんな人間たちが、神を造らうとしてゐる連仲なのか。私は彼等の取るに足らない害意や、彼等の卑怯な貪慾や、屈辱と勞働とで曲つた彼等の體や、心配と悲しみのために曇つた彼等の目や、あらゆる種類の迷信の餌食にされる、彼等のどもつた舌と愚鈍な思想に就いて考へた。こんな蟲けら共に、新しい神が造り出せるだらうか。

怒りと苦い笑ひとが私の心から湧き上つた。私はたしかに、この爺さんに何物をか奪はれたといふ氣持がした。

私は彼に言つた。

『あゝ、お父さん、お前さんは山羊が庭を荒すやうに私の魂を荒した。お前さんの喋つた結果はそれだけだ。だけどお前さんに聞くが、お前さんは誰にでもこんな風に喋るのかい？　私の考へぢや、それは非常な罪惡だよ。お前さんは人間に對して一寸も慾みを持つてゐない。彼等は疑ひもなく慰めを求め探してゐるのだ。それにお前さんは疑ひの種を蒔き散らしてゐる。』

彼は微笑んだ。

『それで私に解つた。お前さんは私が歩いて來た同じ道をたどつてゐるのだ。』

『馬鹿なことを言ふない。私は人間を神と同じ平面へ置きやしない。』と私は答へた。

『けれどもそんなことをする必要は一寸もないさ。もしお前さんが人間と神とを同じ水準に置くなら、それは一人の主人をお前の上へ置くやうなものだ。私は個々の人間のことを言つたんぢやない。民衆のことを言つたんだ。――民衆は地上の結合した精神的な力だ。』

彼はかう言ひ返した。

私は怒りを押へることが出來なかつた。この百姓靴を履いた、虱を一ぱいわかせてゐる神の製造者は所つ中醉つぱらつてゐた。そして打たれたり引つぱたかれたりした。私には彼が言ふに言はれず厭でたまらなかつた。

『默れ、お前は神を瀆す惡黨爺だ。お前のいふ最高の民衆とは何だい。彼等は魂も體も汚れてゐる。内も外も乞食だ。一コペック貰へばいつでも自分の體を賣る奴等だ。』

私はかう言つた。

すると珍奇な出來事が持ち上つた。彼は飛び上つて嘔嗚つた。

『くたばれッ、こん畜生。』

彼は腕を振り廻し足を踏み鳴らした。私は一々の瞬間に、彼が私を撲ちなぐるか突き刺すかしやしまいかと恐れた。彼がつひさつき豫言者めいた調子で口を開いてるときには、彼は言はゞ私からかけはなれてゐた。けれとも、今はかうした可笑しなざまを見せてるので、再びたゞの人間により近くなつたやうに思はれた。

『くたばれッ、この穀物倉の鼠め。』と彼は叫んだ。

『お前の血管にはたしかに惡な臭ひのする貴族の血が流れてゐる。お前は捨兒だ。民衆はお前なぞには用事はないんだ。そんなお前が何を言つてるか自分で解つてるか？だがお前はどちらにしても同じだ。お前は高慢ちきな怠け者だ、土地盜人だ。この狡猾かきの犬め。お前は誰に向つて吠え附いてるのかつてことが解らないんだ。お前たちは人間のものを掠奪した。分捕りをした。お前たちは彼等の背中に乘つかつて、彼等がお前たちの氣に入るやうにさつさと歩かないと言つて彼等を侮辱してゐる。』

彼は私のぐるりを踊り廻つた。彼の蔭が私を暗くした。そして彼の言葉は鞭で撲つた切り傷のやうに私の顏を引つばたいた。私は彼が私を撲りつけやしまいかとそれこそおづ〳〵して飛び退いた。

私はづうたいも殆ど彼の二倍もあるし、恐らく彼よりは十倍も强かつたらうけれど、それでも彼を留めることが出來なかつた。彼は、それが夜中であるといふことも、そのあたりにはだれ一人、人もゐないといふことも、それから、私が撲り倒しでもしたら、彼はどうすることも出來ずそこにくたばらなければならないといふことも全で忘れてゐるやう

に見えた。私は綠色の袈裟をかけた、恐れおびえた大僧正や、氣違ひの律僧ミカイロや、正敎會の色んな坊主たちが、私へ罵詈を浴びせかけたさまを思ひ出した。彼等は私の上手にゐた。それだのに彼等の言葉には臆病らしいところがあつた。けれどもこの男は弱いくせに怖れなかつた。彼は私を子供のやうに叱りつけた。或は寧ろ、母親が自分の子供を叱るやうに私を叱つた。彼の怒りには何だか春の初雷のやうな、奇態にやさしい調子がこもつてゐた。私は、自分に譯のわからない、この老人の猛烈な行爲には全く面喰つた。彼の怒りにはどことなく滑稽な點がありはしたけれども、私はこんなに迄非度く彼を怒らせたのを悲しく思つた。私は私を捨て兒だといふ奴はだれだつて好かなかつたから、彼の侮辱は私を悲しませた。けれども一方ではまた、彼の怒りが氣に入つた。私は彼の怒りは自己の言つてることを信じてゐる男の怒りだと感じたからである。かういふ怒りには心の食料たる愛が澤山に含まれてゐるのだから精神に取つて有益である。

私は彼の足元にひれ伏した。けれども彼は上から私に怒鳴りつけた。

『お前は民衆について何を知つてる？お前は彼等の歴史を知つてるかい、この盲目の馬

鹿め。ともかく民衆の生活の歴史を讀んで見ろ。それはどんな歴史よりも遙に教訓になる。それを讀めば、幸福なことには、お前が自分の前に何を控へてゐるかといふことが解る。よその土地で家もなく乞食をしてゐるお前のぐるりにどんな力が長じつゝあるかゞ解るんだ。お前は露西亞は何だか知つてるかい。或はヘラスと呼ばれてゐる希臘は何だか、又羅馬は何だか知つてるかい。お前はすべての王國は誰の意志、どんな人々によつて造られたか知つてるか。すべての寺院や教會堂はたれの骨の上に建てられたのだい？すべての學者はだれのことばを話してゐるのかい？地上のあらゆる物、お前の心に生きてゐるすべての物は皆んな民衆によつて造られたのだ。けれども貴族たちはたゞその製作品へ最後の磨きをかけたばかりだ……。』

私は一言も發しないで、その老人を——自分が眞理だと信じてゐる事を主張するとなると、自分自身のためには何事をも恐れないこの老人を、親しい目を持つて見守つた。

彼はびつしよりと汗をかき、顏を眞つ赤にして、すつかり息を切らせて下へ坐つた。併も見るとその目に涙が光つてゐた。これまで私と喧嘩をした人間で、私が怒らせたとさに泣いた奴はないのだから、私はそれを見て面喰つた。

『聞けよ、ごろつき。露西亞の國民のことを一寸話してやらう。』

彼はかう叫んだ。

『だけどまづ一寸休んだがいゝ。』と私は言つた。

『默れ。』

彼は私に向けて拳固を振ひながら怒鳴つた。私はどつと笑つた。笑はずにはゐられなかつた。

『お祖父さん。可愛いゝ隱居さん。お前は面白い男だ。お前の氣を惡くしたのは許しておくれよ。』と私は言つた。

『馬鹿もの。お前みたいな奴の言ふことで怒るものか。だが、哀れな奴、お前は民衆のことを惡く言つた。——大きな力のある最高の權威を持つた民衆のことを。民衆を罵るのは貴族どもにはあたりまへだ。彼等は彼等の良心の聲を鈍らせる理由を持つてゐる。彼等はこの世界の他國人だからだ。けれどもお前は何ものだい。』

その瞬間に彼を見守つてゐるのは愉快であつた。彼は威光のある、同時に峻烈な顏附きになつた。彼の聲は穩かでそして深刻であつた。恰も福音書でも謠つてゐるやうに、すら〳〵と、劃律のある調子で話した。そして空の方を熟視した。彼の目はだん〳〵に大きくなり丸くなつた。彼が膝をついたときには、立つてゐる時よりももつと大きく見えた。私は最初は不信の微笑を以て彼に耳を傾けた。けれども、間もなく私は、敎父アントニアスのところにゐた時に讀んだ露西亞の歷史を想ひ出した。それが言はゞ再び私の前に開かれた。

老人はその歷史上の愕くべき話をして聞かした。私はその話の事實と、私が前に本で讀んだ事柄とを比較した。それは兩方とも全く同じものであつた。たゞ解釋が全く異つてゐた。

彼は、下つて、キエヴの古王國滅亡のところまで來ると、かう言つた。

『お前ちやんと聞いてたかい？』

『聞いてゐました。有難う。』

『よろしい、ではかういふことを忘れないでおけよ。――今言つたやうな勇者が實際にゐて戰つたのぢやない。つまり、民衆が、露西亞の建設の大事業を子孫に傳へるために、あゝいふ空想的の人物を持つて來て、自分自身の功績を肉體化したのだ。』

それから彼は再び言葉を繼いでサスダルとその歷史とについて話した。

私は今でも私の心の目の中に、かういふ畫を持つてゐる。――太陽は已に山の後に上りつゝある。夜は森の中に隱れて行つて、いろんな鳥を起こしてゐる。小さい雲が薔薇色の列をして、二人の頭の上に浮んでゐる。われ〳〵自身は岩の下の露にしめつた草の上に坐つてゐる。一人は灰色な古い時代を作り出してゐる。もう一人は、この敵意ある森や林ばかりの土地が、いろんな大きな困難を犯して、いかにして征服されたかといふ話を、疑ひながらも愕いて聞いてゐる。

老人は、恰も自分ですつかり見て來たやうにその話をした。聞いてゐると、强力な腕で操る重い斧の打擊が聞き得られた。人々が氷結した河の進路について、密生した森の底へずん〳〵突き入つて、荒れた土地を開拓し、それを設計するにつれて、沼を排水した

り町や寺院を建てたりするのが聞かれた。けれども、いろんな王公や民衆の支配者たちは、自分等の得た土地を切れ〴〵に細かく切り割いた。そして民衆の強い腕によつて、相互に戰爭をやり、民衆のものを掠奪した。すると高原から韃靼人がやつて來た。併もそれらのすべての王公の間には、たゞの一人も民衆の自由のために戰つたものはなかつた。彼等の間には名譽も力も智識も見出され得べくもなかつた。彼等は人民を韃靼人に賣つた。人民を家畜のやうに韃靼の王たちに呼び賣りにした。そして自分たちの百姓の血を拂つて、自分たちの耕奴を壓する王者の權力を買つた。それから彼等が韃靼人に統御の技術の暗示を與へたときには、彼等は各〴〵を韃靼の王たちに渡して彼等の喉を切らせたのである。

二人のぐるりには、姉のやうに親切で、考へ深いやうに見える、暖かい、おとなしやかな夜が青ざめた。

老人は疲れ切つたのではじめて話を止めた。太陽は最早彼の頭の上にかゝつてゐた。彼は、灼熱した言葉で私に眞理を告げようとする、過去の時代を通しての彼の飛翔を中止

した。

『さうら、人類が何を成しとげたかといふ事が解つたらう？　そして、お前さんがこゝへやつて來て、馬鹿なことを言つて人類を侮辱したその時まで、人類が苦しんで來なければならなかつた事がすつかり解つたらう？　私は今日は、人類が他人の意志のまゝに成し遂げた事を話して聞かせた。暫く休んだら、人類の精神は何の上に生きてゐたか、それから、人類がいかにして神を求めたか、それを話して聞かせよう。』

彼はかう言つて横になつて體を縮かめて小さい子供のやうに眠つた。

二十二

私は眠られないで炭火の惡氣に負けた人間のやうに坐つてゐた。そのときはもう時間も遲かつた。太陽は高く天に上つてゐた。鳥は聲のありたけで謠つた。森は露の沐浴を了へて、さやしやな綠色の揃ひ着を着て、さら〳〵音を立てゝ晝に向つて挨拶をしてゐた。

人々が山を下りて來た。彼等は全く下層な人間であつた。歩くのにからだがこゞんでゐた。私はその人たちの容子に何一つ目に附くものを見なかつた。

私の敎師は眠つて鼾をかいた。私は考へに埋もれながら、靜かに彼の傍に坐つてゐた。人々は代り〴〵側を通つて、私たちを流し目に見た。そして一度も私の挨拶に返しをしなかつた。

『こんなのが、この國を建設した、あの勇猛な戰士——私がついさつきまで話しを聞いてゐたあの戰士たちの子孫であり得ようか。』

私はこんなことを考へた。

夢と現實とが、私の疲れた頭の中でごつたになつた。私は今こそ自分の生涯の危機であることを感得した。老人が、神は民衆の頭腦が生んだものだと言つた言葉が私を煩悶させた。私は自分の中に生きてゐる心より他の心を知らないために、老人の言葉を首肯することが出來なかつた。私はすべての農民を——實際、私の知つてゐたあらゆる男と女とを心の中に畫き浮べ、私の頭を拷問して、私が記憶してゐるだけの彼等の會話を陳述させた。私は多くの諺や虛辭を發見した。けれども思想は殆んど見出さなかつた。私はまた一方では、彼等のひどい奴隷的生活や、毎日の麵麭のために働く熱心な勞働、冬場の窮乏困苦、暗澹たる日々の痛ましい心配、それから彼等の精神に加へられる侮辱をまざ〳〵と感じた。

『こんな生活の中にどこに神がゐるのだ？　神の這入るどんな場所が殘されてゐるだらう？』

老人は眠りをつゞけた。私は彼を搖すぶつて、彼の目のあたりで、